ラテンアメリカ・モノグラフ・シリーズ
No. 24

独立以後 19 世紀末までのメキシコの印刷文化研究における最近の研究動向

EL ESTUDIO DEL IMPRESO MEXICANO DECIMONÓNICO EN AÑOS RECIENTES

長谷川　ニナ
Nina HASEGAWA

上智大学
イベロアメリカ研究所

著者

長谷川　ニナ
上智大学外国語学部教授・イベロアメリカ研究所所員

Autora

Nina HASEGAWA
Profesora del
Departamento de Estudios Hispánicos de la Universidad Sofía,
miembro del Instituto Iberoamericano

*この論文はイベロアメリカ研究所共同研究「グローバル化時代のラテンアメリカ地域研究と教育」の成果である。

目　次／ÍNDICE

I.　はじめに 1

II.　主要文献解説と抄訳 6

A. *Empresa y cultura en tinta y papel (1800-1860)*
（紙とインクの業界と文化—1800 年から 1860 年まで—） 6

B. *Constructores de un cambio cultural: impresores-editores y libreros en la Ciudad de México 1830-1855*（文化的変遷の創造者達—1830 年から 1855 年の間におけるメキシコ市の印刷・出版業者および書店—） 23

C. *Impresiones de México y de Francia*（メキシコとフランスの印刷） 24

D. *La república de las letras: asomos a la cultura escrita del México decimonónico*（文壇—19 世紀メキシコの文筆文化の片鱗—） 31

III.　おわりに 39

I.　Introducción 41

II.　Resultados de los avances principales: síntesis 46

A. *Empresa y cultura en tinta y papel (1800-1860)* 46

B. *Constructores de un cambio cultural: impresores-editores y libreros en la Ciudad de México 1830-1855* 63

C. *Impresiones de México y de Francia* 63

D. *La república de las letras: asomos a la cultura escrita del México decimonónico* 71

III.　Notas finales 78

参考文献／Bibliografía 80

付録資料／Apéndice 82

I. はじめに

ここ十数年の間にメキシコでは、独立期から 19 世紀末にかけての印刷文化の歴史研究が進展し、内外の研究者の間で関心を呼び起こしている。本稿はメキシコ印刷文化の歴史研究における近年の成果を概観し、紹介することを目的としている。第 II 章以下で、その中から最も代表的と思われる以下の 4 つの研究書を選び概説する。

A. Suárez de la Torre, Laura (Coord.) (2001) *Empresa y cultura en tinta y papel (1800-1860)*, Instituto Mora / UNAM, 662 p. (紙とインクの業界と文化—1800 年から 1860 年まで—) [以後 *Empresa y cultura en tinta y papel*]

B. Suárez de la Torre, Laura (Coord.) (2003) *Constructores de un cambio cultural: impresores-editores y libreros en la Ciudad de México 1830-1855*, Instituto Mora, 554 p. (文化的変遷の創造者達—1830 年から 1855 年の間におけるメキシコ市の印刷・出版業者および書店の研究—) [以後 *Constructores de un cambio cultural*]

C. Andries, Lise y Laura Suárez de la Torre (Coords.) (2009) *Impresiones de México y de Francia*, Instituto Mora/ Maison des Sciences de l'Homme, 491 p. (メキシコとフランスの印刷物)

D. Clark de Lara, Belem y Elisa Speckman Guerra (Eds.) (2005) *La república de las letras: asomos a la cultura escrita del México decimonónico*, Vols. I, II, III, UNAM, 1551 p. (文壇 19 世紀メキシコの文筆文化の片鱗)

上に挙げた 4 文献はいずれも大学や研究所に所属する研究者たちの共同研究の成果を整理、編纂したもので、うち 2 冊は共同出版である。そのうちの 1 冊はメキシコとフランスの教育機関による共著として上梓された。

D の発行年は C に先行するが、A、B、C は印刷メディアの歴史を扱い、D は文学史を扱っているため、ここで論じている内容の関係性を考慮して C を先に紹介する。

はじめにこれら 4 点を選んだ根拠と背景について簡潔に述べておきたい。

まず、最初の 2 点は、初めてメキシコの印刷物研究が系統的に整理された、その嚆矢としての研究成果と位置づけられる。

1998 年、メキシコ市のモラ研究所(Instituto Mora)の研究者たちの発案で、「1830 年から 1855 年の間におけるメキシコ市の印刷・出版業者および書店の研究」と呼ばれる、19 世紀のメキシコ印刷文化史の研究を振興するプロジェクトが開始された。この企画を具体化するために、モラ研究所は国家科学技術審議会(Consejo Nacional de Ciencia y Tecnología: CONACYT)から、2003 年までの研究とその成果を上記の最初の 2 冊の書籍にまとめるための助成を受けた。

同プロジェクトのコーディネーターで編者でもある Laura Suárez de la Torre によれば、当時は、印刷分野に関する研究は未発表であった。というのは、19 世紀の歴史研究にお

いては政治分野に重点が置かれており、また20世紀に入ってからの時代についても、文化より社会経済分野に焦点が置かれていたからである。

Suárez de la Torre は1998年時点での印刷物文化研究の遅れについて触れ、個別にこの分野の研究をおこなってきた先駆者達の功績は評価するものの、独立を通して国家的なアイデンテンティの形成に重要な役割を果たした出版物に光を当て、その研究を推進することが急務であったと述べた。そしてモラ研究所の10年弱に及ぶ努力によって、メキシコの印刷文化史研究は飛躍的な進歩を遂げたと語っている[1]。

プロジェクトに参加した研究者達が最初に自らに課した課題は、1830年から1855年にかけての印刷・出版業者および書店の活動の歴史の再検討であった。Suárez de la Torre の言葉を借りると、「(彼らこそが)(独立共和国にふさわしい)出版文化を構築する役割を果たし、その印刷物によって世論を形成していったのである」(Suárèz de la Torre 2003: 8)。

メキシコが独立宣言をおこなった1821年以後、社会のあらゆる領域において文化的な変革がみられた。その変革には知識階級がきわめて重要な役割を果たした。彼らは植民地文化を保持しつつも、同時に新時代にふさわしい文化を創造したのである。Laura de la Torre によれば、植民地時代の出版はスペイン王による許可制であったが、独立によって出版の自由が確保されたことにより、出版者の役割が「再生され、活性化された」(同上書: 13)のである。

当時まで圧倒的な分量だった宗教的な印刷物(カトリックの説教や教理問答など)は減少し、植民地時代のアメリカ大陸ではほとんど流通していなかった科学分野や、ヨーロッパで流行していた文学や政治動向について書かれた出版物が増大した。

旧スペイン世界に閉じ込められていた19世紀のメキシコ人たちは植民地政府の検閲から解放され、世界で実際に起こっていることを知ることを渇望していた。ヨーロッパや(時には北米)の文献を翻訳し、知らしめることは出版・編集者にとって最重要の課題だった。

それは、とりわけ首都に住むメキシコ人たちにとって「入手できる出版物の幅が一気に広がり、いろいろな判型に接し、新しいジャンルの文学に親しみ、挿絵の完成度が上がり、そこからメキシコ人作家が生まれ育ち、ロマン主義の影響を受けた」(同上書: 16)ことを意味した。

研究分野の材料の豊富さと複雑さを考慮に入れ、モラ研究所の研究グループは、メキシコの歴史・アイデンティティ形成の過程において特筆すべき影響を与えた5つの出版者に的を絞ることとした。それは Mariano Galván Rivera、Ignacio Cumplido、José Mariano Lara、Vicente García Torres、Rafael de Rafael y Vilá の5人である。

しかしながら、Suárez de la Torre によれば、上記の研究を始めた時点では、彼ら5人についての「情報は乏しく、不十分なもの」(同上書: 8)で、「独立後のメキシコ文化の発展における彼ら一人一人の重要性を明らかにするには、あまりにも短く断片的な自伝的データ」(同上書: 8)しか存在しなかった。そのため本格的な分析に入る前に印刷に関

する学問的な議論を活性化するため、モラ研究所は2000年5月29日～31日にかけて、メキシコ各地の大学や研究機関から集まった19世紀の歴史・文学・ジャーナリズムを専攻する45人の専門家によるシンポジウムをおこなった(Suárez de la Torre 2001: 7)。

Suárez de la Torreは彼女とその研究チームにとって、「経営者の野心、編集企画、出版の問題、活字の衝撃、考え方の変化、権威との関係、政治理念の擁護、版元の日常業務、読者の環境、また印刷物の取引」などが、この研究における主なテーマとなったと説明している。明らかに、彼らの研究対象へ向けたこのような重要な視点はフランスでの豊富な研究業績が参考にされている[2]。

上記5名の出版者の作品、生涯、文化的影響についての研究の成果は *Constructores de un cambio cultural*［文献B］にまとめられている。同文献では以下のことが明らかにされた。

① 「彼ら編集者たちについて個人としての文化的プロモーターとしての業績と、社会的に」判断される文化伝達のエージェントとしての業績の双方を展開することができた環境を考慮することなしに、その業績評価の適切な理解をすることはできない。」（同上書: 18）

② 「彼らのビジネス（としての出版事業）が発展した度合いが、彼らが文化のプロモーターでありメキシコ独自の文学の庇護者として到達した重要性を明白に物語っている」（同上書: 18）

この他、前述の45人の専門家によるシンポジウムでの発表をもとに、2001年に *Empresa y cultura en tinta y papel (1800-1860)*［文献A］が刊行された。同書は、19世紀の印刷物とそれらが発達した時代の歴史的・文化的背景に関する幅広いテーマを扱っており、それまでメキシコ人の間ですら知られていなかったメキシコ近代史の空白に光を当て、19世紀メキシコの社会文化の奥深さを描き出した。これにより、メキシコ人のアイデンティティが形成される過程をより詳細にあらわしている。

2009年にはモラ研究所とパリ人間科学財団(Maison des Sciences de l'Homme de Paris)の共同出版によって *Impresiones de México y de Francia*［文献C］が出版された。同書はメキシコ側からは、CONACYTとメキシコ高等教育機関協会(Asociación Nacional de Universidades e Instituciones de Educación Superior: ANUIES)、フランス側からは北部ラテンアメリカ科学研究評価委員会(Programe d' Evaluation de la Coopération Universitaire et Scientifique: ECOS-Nord)[3]の資金援助によって出版された。メキシコにおけるフランスの印刷物の影響、およびフランスの印刷界に対するメキシコの影響について記している。

この二国間プロジェクトのコーディネーターはLaura Suárez de la TorreとLise Andriesであり、彼女らは本書の特徴と、内容において特に強調したい点について次のように説明する。

本書は2004年から2007年度の「19世紀の出版と文化伝播」と題するCONACYT、ANUIES、ECOS-Nordの三者の協力プログラムの成果である。

①プログラムの目的は当初「歴史的な文脈の中で有意義で特筆すべき翻案と借用のダイナミックな過程を描写すること」とされたが、ここで「借用とは消極的な模倣という意味ではない」と理解された。なぜなら「ヨーロッパから来たものはそれ自体意味のある選別の過程を経て、翻案され、変化したからである」(Andries & Suárez de la Torre 2009: Vol. I , 38-39) 。

②この研究のプロセスにおいて、「メキシコとフランスを同質的存在とみなして、単に似た部分と異なる部分をリストアップするのではなく、動態的な交換のプロセスを記述することがめざされた(同上書: 38)。

③印刷物にかかわるすべての周辺事項(当時の事物、人物、思想など)を考慮に入れた(同上書: 39)。

④フランスーメキシコの二元論は避けた。なぜならメキシコにとって、スペインが依然として宗教的、文学的、言語的視点から参考とすべき国であり続けていたからである(同上書: 39)。

⑤この二国間の関係が不均衡であることは十分承知したうえで、あえてフランスからメキシコへの文化移転を特別扱いすることはしなかった(同上書: 39)。

⑥新聞小説などの場合のように、文化交流の現象を表す内容であると理解される場合は時期的なずれがあったとしても研究対象とした。

⑦「(両国において)出版物はどのような読者に向けられたのかという本質的な疑問に答える」(同上書: 29)ことを重んじた。

⑧「新聞分野における文化的な伝播」を特に重んじた(同上書: 33)。

⑨「大西洋の両側で出版物の流通と頒布」、印刷物の「新聞の挿絵や見出し」、「両者の出会いによる思想的な議論やその潮流」(同上書: 33-36)について扱った論文を集めた。

⑩この最新の研究結果は前の 2 冊の研究書と同様に、極めて満足度の高いものであった。なぜならメキシコ人研究者とフランス人研究者の間に多くの時間を共有する機会があり、「真に知的な交友関係に至る緊密にアカデミックな交流」(同上書: 26)を創造することができたからである。

⑪このプログラムの枠内で、2007 年に 2 つの国際シンポジウムがフランス・モンペリエの Paul Valery 大学とメキシコ国立自治大学(Universidad Nacional Autónoma de México: UNAM)の文献学研究所(Instituto de Investigaciones Bibliográficas)で開催された。

19 世紀のメキシコの印刷物というテーマに関しては、モラ研究所による 3 冊の研究書とは別に、UNAM による 3 巻の研究書がある。これが文献 D である。1998 年、UNAM の文献学研究所と歴史研究所の合意により、モラ研究所と同程度の規模のプロジェクトが発足した。その目的は単に有名作家による小説や詩、物語や戯曲を扱うだけではなく、カレンダーや新聞記事、三面記事的なものや声明文、政治演説などにも視野を広げつつ 19 世紀のメキシコ文学史を描くというものであった。このプロジェクトは質的にも量

的にも、期せずしてモラ研究所のものと補完し合っていた。

同プロジェクトには総勢 84 人の研究者が参加し、計 88 本の論文(うち 50 本が文学、38 本が歴史)が 3 部に分けられ、歴史の専門家 Elisa Speckman Guerra と文学の専門家 Belem Clark de Lara の編纂によって、2005 年に出版された。各巻のタイトルは以下の通りである。

①Clark de Lara, Belem y Elisa Speckman Guerra (Eds.) (2005) *La república de las letras: asomos a la cultura escrita del México decimonónico: ambientes, asociaciones y grupos, movimientos, temas y géneros literarios*, Volumen I, 414 p.(文壇 19 世紀メキシコの文筆文化の片鱗 文壇の環境とグループ、文学運動、テーマ、文学ジャンル)

②Clark de Lara, Belem y Elisa Speckman Guerra (Eds.) (2005) *La república de las letras: asomos a la cultura escrita del México decimonónico: publicaciones periódicas y otros impresos*, Volumen II, 436 p.(文壇 19 世紀メキシコの文筆文化の片鱗 逐次刊行物とその他の印刷物)

③Clark de Lara, Belem y Elisa Speckman Guerra (Eds.) (2005) *La república de las letras: asomos a la cultura escrita del México decimonónico: galería de escritores*, Volumen III, 701 p.(文壇 19 世紀メキシコの文筆文化の片鱗 作家たち)

第 1 巻の前書きで Belem Clark de Lara は、88 点にも及ぶ論文を適切に編集する枠組みを考案することは簡単ではなかったと語っている。最初の発想は素材を分類するにあたって、時代背景、文学運動、文芸ジャンル、作者の世代などによっておこなうものであったが、それらは結果的にあまり効果的とは言えなかった。なぜならそれら全てを扱った包括的な論文の内容を適切に分類することができなかったからである(同上書: 15)。

Elisa Speckman Guerra は同じ第 1 巻の前書きで、19 世紀は印刷のブームがあったことが 1 つの特色であり、それらは歴史的な環境に刺激されて生まれたものであり、簡単に把握出来るものではないと語る。その環境とは「独立を契機にした政治的な理想や論議の沸騰」「新国家を建設するという緊急課題」「米国との戦争とテキサスの分離以後の国家的プロジェクトの方向性に関する議論」「メキシコ領に住む人々のアイデンティティを形成するためのシンボルを作り、国家としての州同士の絆を強める必要性」「ヨーロッパや米国の文化の潮流や流行の到来」「印刷産業での新技術の誕生」、そして、「コミュニケーション・メディアや情報の伝達の改善」(Clark de Lara & Speckman Guerra 2005: Vol.1, 47)などである。これらの現象の研究こそが以下の独立後の最初の世紀の「概念、知覚、価値観、表象、偏見、恐怖、幻想(同上書: 49)を理解するための鍵であった。

Speckman Guerra は、研究対象の広さにもかかわらず「これらの論文の大多数で示されている主題と知的好奇心は、19 世紀メキシコにおける印刷文化を対象にした多くの研究者たちに共通した認識であった」(同上書: 49)と語る。研究者達は単に研究対象となった人物達のプロフィールを知るだけではなく、「当時の国が抱えていた重要な数々

の問題に対する立ち位置」(同上書: 49)や「彼らの書いた物の(社会的)反響」や「(それらの記事の) 読者の特徴」(同上書: 49)といったものにも目を向けたのであった。

II. 主要文献解説と抄訳

本章では第I章で紹介した4つの主要文献について、各文献を構成する論文の中から筆者が特に当時のメキシコにおける印刷文化研究の背景を知る上で重要と考える論文を選択し、抄訳を行う。

A. *Empresa y cultura en tinta y papel (1800-1860)* (紙とインクの業界と文化—1800年から1860年まで—)

本書はLaura Suárez de la Torreが編集した論文集で、既に述べたように2000年の国際シンポジウムでの報告を基礎としている。①出版社の問題と利益、②メキシコ市の出版者、③地方の出版者、④出版物の小売商人、書店、読書室、⑤読み物、⑥文化的プロジェクト、⑦文化的傾向とその問題、⑧当時のベストセラー、⑨ジャーナリズムと文学という、9つのテーマに分けられた45篇の論文から成っている。以下ではその中から次の12論文を選び、要約、紹介する。

最初の4論文は、19世紀フランスのベストセラーであった*Los misterios de París*(パリの秘密)のメキシコ翻案版が登場した経過、メキシコで自由で自発的な詩人達の集まり(la Arcadia Mexicana)が生まれた背景、出版の自由に関するメキシコ人の初期の見解、そしてメキシコにおける最初の著作権をめぐる裁判について、それぞれ扱っている。これらはいずれも当時のメキシコにおける出版文化の形成期を物語るものである。

続く5論文は、19世紀上半期のメキシコでもっとも重要な5人の出版者とその出版社の誕生に関する論考であり、シンポジウム開催の契機となった研究課題を扱ったものである。この5つの報告は、その後各出版者に関するより総合的な論文に発展し、文献B編纂の各論となる。

最後の3論文は、女性出版者の登場の契機;独立直後に旧植民地諸国間でのコミュニケーションの道具として採用されたカスティリア語(スペイン語)の公用語としての可能性と問題点に関する議論;フランスの啓蒙思想がカトリック教理問答書や辞典などを通じて、広まった過程をそれぞれ扱っている。

1) "Misterios de *Los misterios de México*, la litografía como narración" (『メキシコ市の秘密』の秘密 石版画が物語ること) (pp.573-587)

Vicente Quirarteはこの小論で、メキシコの印刷文化史中の、興味深い1つの試みを紹介している。それはEugène Sueが1841年から1842年にかけて*Le journal des débats*紙

に連載し、大成功を収めたパリをテーマとする小説*Les mystères de Paris*(パリの秘密)に着想を得た、メキシコ市を主題とする挿絵入り小説 *Los misterios de México*(メキシコ市の秘密)である。このベストセラーを狙った書籍は 1851 年に出版されたが、Quirarte によると *Les mystères de Paris*の最初のスペイン語版は 1844 年にフランスで出版され、その後、1851 年にメキシコでも出版されている[4]。

この作品は「メキシコ市そのものが舞台であり主人公である」(Suárez de la Torre 2001: 575)ことをめざしており、その点において先行する Fernández de Lizardi の *Periquillo sarniento* や Fernando Orozco y Berra の *La guerra de treinta años* などの小説とは明確に違うものであった。これらの作品はメキシコの首都を舞台にしているものの、都市そのものが主人公ではなかったのである。

しかし、この試みはメキシコの読者の人気を得ることはできず、*Les mystères de Paris* のような成功を収めることはできなかった。このプロジェクトを立ち上げた 2 人のフランス人と 3 人のメキシコ人の名前は判明しているが[5]、挿絵画家と作家は特定できていない。もっとも Quirarte 自身は、石版は Casimiro Castro のものであり[6]、彼の初期の重要な作品であると確信している。また、小説部分はおそらくフランス人の Rivière が作者であり、スペイン語にするにあたって Carlos Hipólito Serán の協力を得ていたのではないかと考えている。

このことに関して「役者であった Rivière の口述を通訳の Serán が同時翻訳筆記していたのではないか」(同上書: 578)。Quirarte は、*Antonino y Anita o los nuevos misterios de México*(アントニーノとアニータ、もしくは、メキシコの新ミステリー)[以後 *Antonino y Anita* と略する]という小説が、奇妙なことにメキシコ文学史にもフランス文学史にも現れないことに気づいた。この作品と同一のテーマで 1850 年に出版された Niceto de Zamacois の作品(短編叙事詩 *Los misterios de México*)と比較し、*Antonino y Anita* を「とんでもなく下手くそ、Zamacois の作品にも瑕疵は多いが、まだまし」(同上書: 578-579)であるとしている。

結論から述べると、*Antonino y Anita* は小説部分より挿絵部分に大きな価値があり、小説部分は当初の構想のようにメキシコ市の歴史を内側から語ることに成功していないが、挿絵部分は見事にそれをおこなっているのである。この"Misterios de México"(メキシコのミステリー)を書こうとした先駆的な努力は、皮肉にも Castro の絵がそれを果たしたのである。それこそが Quirarte が論文の中で浮かび上がらせたことであった。

Castro の石版画は広重の版画と似た繊細さを持ち、描く空間そのものが呼吸しているかのように生き生きとしている。彼は浮世絵を知らなかったが、優れた絵画教育を受けたために、洗練された作品を描くことができたのである。彼の師は Pietro Gualdi というイタリア人で、ミラノの美術学校で絵画と演劇を学んでおり、1838 年にあるオペラの一座と共にメキシコに来るまで、スカラ座の舞台美術家をしていた。彼はメキシコ市の San Carlos 美術学校で、Castro をはじめとする多くの学生に遠近法などの講義をおこない、その後、米国に渡り、そこで 50 歳の生涯を終えた。

1840 年代から 50 年代は、多くの博識な外国人がメキシコを訪れ、独立したばかりの国の文化を豊かにするとともに、彼ら自身も得るものがあった時代だったのである(同上書: 577)。

さて、19 世紀のヨーロッパ文学に詳しく、Eugène Sue の小説が世界各地で反響を呼んでいたことを示してくれた Quirarte に話を戻す。メキシコでは、Manuel Payno が Sue の作品に影響を得て、かつてメキシコに存在しなかったような風俗小説 *Los bandidos de Río Frío*(リオ・フリオの盗賊)を書いた。同様のことが、Guillermo Prieto や Ignacio Ramírez や Niceto de Zamacois にも起こった。彼らは皆、彼らなりの"Misterios de México"を書こうと意図し、後にそれを実現している[7]。皮肉なことにフランスの Sue の小説のオリジナルのタイトルをつけた作品(*Antonino y Anita o los nuevos misterios de México*)は、Quirarte によると「文章と挿絵の乖離のために」(同上書: 578)また「場面が誇張され、しかもその組み合わせが悪い」(同上書: 578)ために期待はずれなものとなったという。

Quirarte によれば、この小説の失敗は「興行的なノリ」(同上書: 579)で作られたことにある。「19 世紀前半まで文学作品は舞台によって広まり、文章よりも舞台的な要素が優先された」(同上書: 579)。*Les Mystères de Paris*(パリのミステリー)メキシコ化プロジェクトにかかわった 5 人のうちの 2 人(Serán y Rivière)は戯曲作家であり、そのことがメキシコの最初のロマン主義派作家である Rodríguez Galván に「登場人物が人間である前に、最初から最後まで狂ったように怒鳴り合っている」(同上書: 579)とまで酷評されるに至った。

しかし、メキシコ市のもつ雰囲気を卓越したテクニックで捉えた石版画は良き収穫だった。この挿絵は「19 世紀半ばのメキシコ市が圧倒的かつ官能的な自然の豊かさとともに立ち現れ、人々の衣装がその舞台背景の中で別の種類の表象、(中略)俗なるものと聖なるものとの空間を形作っている」(同上書: 585-586)。すなわち石版画が、街そのものを無機的で無個性的なものではなく、それ自体が命を持つものであるかのように表現している。そのうえ「この書籍の挿画は数多く複製されているが、オリジナルを見ない限り、カストロの繊細な仕事を評価することはできない」(同上書: 586)と断言している。すなわち、このオリジナルの挿画を正当に評価することによって、石版画(その紙質、描線、顔料)が、メキシコ市そのもののように、魂を持ち、そしてそれゆえに、街の生きた(それにふさわしい)イメージを感じさせてくれるのである。

2) "Las primeras discusiones en torno a la libertad de imprenta: *El Diario de México* (1811-1815)"(出版の自由をめぐる初期の議論 *Diario de México* 紙[1811 年～1815 年])(pp.473-488)

Diario de México 紙における出版の自由をめぐる初期、すなわち独立戦争の最初の数年間(1811-1815)の議論について、Susana María Delgado Carranco が論じている。それは、ひとたび出版の自由が認められた 1810 年 11 月に、副王が独立の声が高まるのを恐れ

て、その自由を規制するまでの期間に *Diario de México* 紙に投稿された一般の人々の意見を分析したものである。この論文はさほど長いものではないが、内容は興味深い。

Delgado Carranco 女史は *Diario de México* 紙誕生の背景について短い紹介をしている。*Diario de México* 紙は Jacobo de Villaurrutia と Carlos María de Bustamente の 2 人によって、当時の副王領政府の許可を得て、1805 年 10 月に設立され、紙面は 4 頁で価格は半レアル、12 ヵ所の煙草屋で午前中に販売された。1805 年から 1817 年まで刊行され、約 400 部の発行部数があった。「購入者は少ないものの、多くの人に読まれていた」(同上書: 475)が、最終的には 70 部に落ち込んだ。

Delgado Carranco 女史はこの出版自由法の内容にも触れている。この出版自由法は 1810 年 11 月のナポレオンによるスペイン侵略の際、スペイン本国の臨時政府が発効したものである。同法が発効されてから、スペイン本国およびスペイン領(ヌエバ・エスパーニャ)では、政治的な意見を書いたり、印刷したり、出版することに一切許可が要らなくなった。すなわち検閲局がなくなり、文筆家と発行者が自ら出版物に責任を負うことになったのである。

しかし、出版、印刷の自由が許されたとはいえ「名誉毀損や誹謗中傷、君主制に対する基本的な法律を逸脱するもの、退廃的であったり、公序良俗に反したりするようなもの」(同上書: 476)については依然として制限があり、「この新しい権利に便乗し、度を超した物」(同上書: 476)は罪に問われることになった。

彼女は、この法律をめぐって起こった 4 点の事例を挙げている。

①副王領政府は当初から植民地の自治運動を促進することになるのを恐れ、この法律を極力、骨抜きにしようと試みた。

②にもかかわらず、1812 年 9 月 30 日にスペインからの命令が来たため、カディス憲法と共にこの法律はいやおうなく発効することとなった。

③出版の自由はわずか 60 日しか続かなかった。というのも 1812 年 12 月に「非常事態が落ち着いたら」(同上書: 478)、もう 1 度復活させることを言い訳として、検閲庁の意見も聞かずに法律を廃止したからである。

④法律を廃止した理由は「公開の場での過度の政治批判や政治的論争が起こり、日常的に政治に対する疑問や不信感などが露わになったから」(同上書: 478)であった。

しかし、「たとえ出版の自由が廃止されても、消えがたい前例を作った」(同上書: 479)、植民地メキシコでは「外国から届く本や冊子、新聞などが読み続けられ」(同上書: 479)ており、この法律が依然として機能するスペイン本国から到来する情報が発行され続けていたのである。そして「出版の自由の必要性は新聞の発行者にも強い自覚として残り」(同上書: 488)、法律が廃止された後も、彼らは自らの意見を発表し続けることとなった。*Diario de México* 紙はこの 1810 年発効の法律の「利点と欠点を論評するための重要なメディア」(同上書: 488)となったのである。

3) "Periodismo y literatura en los albores del siglo XIX"(19 世紀初期のジャーナリズムと文学)(pp. 591-598)

Jorge Ruedas de la Serna は、メキシコの最初の文芸家協会についての研究をまとめている。この文芸家協会は 1805 年、スペイン政府がかつてなく植民地における表現や結社の自由について恐れを抱いていた時期に誕生した。この論文の中で彼は「詩人達が『メキシコの理想郷(アルカディア)』と呼んだ非公式な集まりが、どのように自然発生的に生まれたか」(同上書: 591)を語っている。まず、知っておかなくてはならないことは、この検閲で締めつけられていた植民地社会では、*Diario de México* 紙を通じて疑問やコメントや詩を投稿し、互いに自由にコミュニケートするということはきわめて斬新なことであり、珍しいことだったということだ。

Ruedas de la Serna によれば、これは副王の支配から離れ、「市民社会のイニシアチブから」(同上書: 591)生まれた、植民地時代の最初の文学ギルドであった。実際、「植民地時代を通じて、文筆家が集まることは公の式典などでのみ許されていたため、この集団も半ば仮装隠蔽された集まり」(同上書: 596)であったことは、はっきりさせておかなくてはならない。この *Diario de México* 紙という媒体がなければ、国の異なる地域に在住する詩人達が文章を交換する機会はなかったであろう。Ruedas de la Serna によると、*Diario de México* 紙はメキシコ初の日刊新聞であっただけではなく、投稿という制度を取り入れたことで、出版社と読者の交流の場を作ったという点でもパイオニア的存在であった。「同紙の編集者は新聞を販売していた 12 店の煙草屋にポストを設け、手紙や協賛作品を受け取って、そういった作品や投稿を掲載することを約束していたのである」(同上書: 595)。

Diario de México 紙は 1805 年 10 月 1 日に誕生した。その前には *Gaceta de México* 紙しか存在していなかったため、それは社会にとって大きな前進だった。当初、人々は紙面に参加することに熱狂した(同上書: 595)。しかし、この実験はすぐに終わりを告げた。なぜなら植民地政府が、人々が意見を表明し、連帯することを恐れ、すみやかに「投書」のシステムを禁止したからである(同上書: 595)。

Ruedas de la Serna は伝統的に「アルカディア」と呼ばれてきた、西洋各地で起こった文芸協会的運動の独自性についても簡単に触れ、「それは詩と音楽を得意とする繊細さをもつ羊飼いたちが棲んだ、一種の理想郷であった」(同上書: 592)と言う。すなわちアルカディアのメンバー達は(すべての詩人達は自分達自身を羊飼いと呼び合うことで、性別も社会的な身分も隠し)「社会的なヒエラルキーを拒絶し」(同上書:592)、彼らの中で民主的で唯一「他の職能組合のように、文芸もまた職業としての独自性を持つものとしてアピールしてきた」(同上書: 592)。

この概念は紀元前 1 世紀ごろに生まれ、18 世紀にローマやブラジルで生き続けたラテン的伝統であった。しかし、これらの国のアルカディアのメンバー達とは違い、メキシコにおいては新聞を媒体としたコミュニケーションであったと Ruedas de la Serna は説明し

ている(同上書: 597)。メキシコの文学史は常に何らかの雑誌や新聞と連動していた(同上書:596)。メキシコのアルカディアは独立戦争の 5 年前に誕生し、独立後速やかに消滅したということは非常に意味ありげである。ごく最近までこのアルカディアに光が当たることはなかったが、Ruedas de la Serna はこのアルカディアが「独立戦争の前哨としての国民的自覚を呼び覚ますのに貢献した」(同上書: 598)と認めるべきであると唱える。

4) "La propiedad literaria: el caso de Carlos Nebel contra Vicente García Torres (1840)"(Carlos Nebel の Vicente García Torres に対する出版権裁判[1840])(pp.489-504)

ここで Martha Celis de la Cruz による、Carlos Nebel と Vicente García Torres との間に起こった法律闘争と、メキシコの出版権法に対するの影響についての研究を紹介する。この論文はメキシコにおける、著作権に関する最初の論議について掘り下げたという点で興味深い。

この裁判はドイツ人画家の Carlos Nebel が、1849 年に彼の許諾を得ず、無断で出版された *Viaje pintoresco de la República Mejicana*(メキシコ合州国での絵画的な旅)に関して、メキシコ人出版者 Vicente García Torres を訴えたものである(同上書: 489)。

こ Carlos Nebel の美しい石版画は、現在インターネットで鑑賞することができる。これらの 1 枚 1 枚の石版画にかけられた多大な労力を目にすれば、これらの作品を無断使用された Nebel の怒りは理解できる。しかしながら、メキシコの歴史を知っていれば、García Torres の立場も理解できるのである。すなわち Nebel が自分の作品を保護しようとしたのが自然であるように、García Torres はこの優れた作品を自国民に紹介しようとしたのも自然なことであった。

Celis de la Cruz は問題となっている双方の言い分を説明すると共に、実際におこなわれた 2 つの裁判の 2 つの結果について解説する。最初の裁判で敗北した Nebel の弁護士は、彼の依頼人の作品は十把一絡げにできるようなものではなく、「50 点の版画作品コレクションはメキシコの遺跡、衣装、遺物や、その他の興味深い文物について様々な角度から描いたものであり、さらにそのそれぞれに文章による解説を加えることにより、この分野において最も知的かつ啓発的なものとなっている。この作品を作るために Nebel は長期間を費やし、長く大変な旅を重ね、巨額の資金を費やしている。(中略)モンテ・ビルヘン(現在のエルタヒン遺跡)のピラミッドの画一枚のために 1 ヵ月以上の歳月と 1200 ペソ以上の金額をかけている。(中略)。その後、パリでかの地の最高の職人の協力により、すばらしい石版作品に仕上げた彩色をおこなった。(中略)しかしながら幸運は作者の努力に報いず(中略)、(船に積まれていた彼の著作は)フランスとの戦争のためメキシコ上陸を果たせず、やっと上陸許可が出たと思えば、ベラクルスの税関で火事が起こり、この長年にわたる危険と労力と投資の成果は水の泡となってしまった(中略)。しかし、Nebel はそれでも断念せず、改めて情熱を持ってパリに戻り(中略)」(同上書: 496)再版をおこなったのである。

García Torres の弁護士は、Nebel の本はベラクルス港で素材が消失するずっと前の

1836 年以後の段階で、スペイン語版やフランス語版が作成され、ヨーロッパで広く商業的に販売されて成功を収めており、García Torres 版がすでにかなりの利益を得ていた Nebel に損害を与えたとはまったく言えない。さらにメキシコの出版者が「メキシコ人に教養をもたらし、進歩をはかり、自らの文化を知る機会を与える」(同上書: 499) この重要な作品を適切な価格で世に広めることは正当であると考えられると主張した。すなわち、もし García Torres がこの本を出版していなければ、一般のメキシコ人は決してこの作品を知ることはできなかったのである。

そこで根本的な疑問が投げかけられる。すなわち外国人である Nebel が「我が国の遺跡や遺物や町の風景など、あらゆる特徴的な風物を描きに来て、地勢図までも作成した自由があったにもかかわらず、それから 4 年を経ても、我々メキシコ人は、彼の作品を印刷する自由すらないというのか」と問い、最後にこう締めくくっている。「メキシコは今までその種の法律を作っていない。なぜなら知識の頒布の妨げになり、人々の知る権利を奪うことになるからである」(同上書: 499)。

そして 1841 年 3 月 7 日、Nebel は敗訴した。Celis de la Cruz によれば、この裁判で明らかなのは、当時「知的所有権に関しては混乱が存在」(同上書: 499) していたということである。「著作権法制化の必要性の提起については、出版の自由や商業の自由と混同されていた」(同上書: 500) のだ。フランスの法律でも「1777 年までは、この著作権については認められていなかった。それ以前は単に許諾や特権によって、すべてが印刷物となっていたのである。1791 年に、戯曲に関しての著作権が認められ、その後、その他の分野にも拡大した」(同上書: 491)。

Celis de la Cruz はこの問題について、さらに詳しく言及している。

① 1793 年には作者の相続者は作者の死後 10 年間にわたって権利を保持することとされていた。

② 1810 年には権利保持期間が 20 年に延長された。

③ 1823 年にはスペインのカディスの法廷(Cortes de Cádiz)で、著作権が法的に認められた(同上書: 491-493)。

メキシコにおいては「独立後 30 年間にわたって、(1805 年制定の) Novísima Recopilación de las Leyes de España (最新編集版スペイン法) が使用されていたため」(同上書: 492)、Nebel と García Torres との間の法廷闘争によって、「早急に著作権問題を法制化する必要性が生じ」(同上書: 495)、1846 年になって Lafragua 法こと著作権法が制定された(同上書: 495)。さらに付け加えると、「この法廷闘争の件は、政府の公式新聞である *Diario del Gobierno de la República Mejicana* 紙が 8 ヵ月にわたって取り上げたことで、衆知のこととなった」(同上書: 489)。

Celis de la Cruz のこの論文は、この論議を基にして書かれたものである。

Nebel の 2 度目の裁判では、Celis de la Cruz は「Nebel の弁護士は、彼の依頼人の権利

を護り、この件によって発生した損害が賠償されるべく、控訴を行うと主張した」(同上書:495)とだけ述べており、1846 年制定の Lafragua 法の詳細については触れていない。しかし、「1857 年の憲法ができてはじめて、出版する側の権利と、著作者側の権利についての規定が生まれた」(同上書:500)のである。

彼女が脚注(No. 20)で触れているデータによると、Nebel は 1855 年に 50 歳でパリで没しており、1857 年の憲法で起こった改訂については、知ることはなかった。

5) "Origen y desarrollo de una empresa editorial: Vicente García Torres 1838- 1841"(Vicente García Torres 工房の起源と発展 1838-1841)(pp.123-130)

Othón Nava Martínez が、出版者としての Vicente García Torres の出発点について研究している。

この論文では、いかにして「García Torres がわずか 3 年の間に、無名の人物からメキシコ市でもっとも重要な出版工房を持つに至ったか」(同上書: 123)に関する短期間(1839-1841)の出来事に焦点を当てている。

1846 年に、メキシコで最も重要なリベラル系の日刊紙である *El monitor republicano* 紙を創刊したこの工房の最初の発行物は、もともとフランス語で書かれた *Tratado completo de diplomacia*(外交についてのすべて)のスペイン語翻訳版であった。当時、作家の Guillermo Prieto が語ったように、誰ひとり、そのような学問的な書物が、いわゆる「肉屋などの道端で商売をしているような階層の人々」(同上書:124)である García Torres の顧客の間で売れるとは想像もしていなかった。

1839 年、García Torres は、今度は「外国もの、特に同名のフランスの雑誌や、イギリスやスペインの同様の物の翻訳物」(同上書: 125)である *Diario de los Niños*(子供の日記)を販売し、大成功した。これらの出版物の儲けで、彼は、自分の出版工房を開くに至った。すなわち、Othón Nava Martínez によると「最初の 2 冊は、1839 年に Miguel González の工房から出たが、3 冊目には、すでに、自分の工房である Vicente G. Torres から出していた」(同上書: 125)。

この論文によると、3 冊目は単に挿絵がふんだんに使われているだけではなく、字体や装丁などもすべてが非の打ちどころのないものだった(同上書: 123)。前の論文「Carlos Nebel の Vicente García Torres に対する出版権裁判(1840)」に記されているように、García Torres はヨーロッパの出版物の愛好者であり、同胞にそれらを知らしめるためには、たとえ印刷が非常に高価についたとしても努力を惜しまなかった。

Nava Martínez ははっきりと言及していないものの、García Torres の進取の気性に富む点を高く評価しているようで、彼が文化的なプロジェクトを具体化する才能について記している。García Torres は決して彼の読者の知性や好奇心を侮らなかった。その証拠に 1840 年(Nebel と対決したその年に)、別の非常に野心的な作品 *El universo pintoresco o Historia y descripción de todos los pueblos, de sus religiones, costumbres, usos, industria, etc.*

con 3000 láminas finas que representan las vistas principales, los monumentos antiguos y modernos, los retratos de los hombres más célebres, los trajes, muebles, alhajas, armas y otros objetos curiosos(絵画的世界、もしくは、あらゆる民族、宗教、風俗、習慣、産業等の歴史とその描写、主な景色・古代遺跡・現代建築・高貴な人々の肖像・衣装・家具・宝飾品・武器・その他の珍しい品々の 3000 の上質な図版入り)を出版している。

女性たちには、*Semanario de las señoritas mexicanas: educación científica, moral y literaria del bello sexo*(メキシコ女性の週刊誌 女性向けの科学・道徳・文学教育)を発行した。Nava Martínez によると、「この雑誌は彼のキャリアの中の重要なステップだった。というのもこの雑誌によって、それまでの外国物のコピーからオリジナルな内容へ移ったからである」(同上書: 128)。この雑誌はまた、メキシコで最初の女性向け雑誌であったわけではなかったものの、(その前に 1836 年～1842 年の Ignacio Cumplido による *El mosaico mexicano*[メキシコのモザイク]や 1837 年～1838 年の Mariano Galván による *El recreo de las familias*[家族の娯楽]といったものがあった)商業的な成功を収めた。

そして、1842 年には彼は「メキシコ国内の販売網を築いていた」(同上書: 128)。それは驚くべきことだった。というのも、当時のメキシコは慢性的に政治経済が不安定で、この種の文化的な努力を続けるのは非常に大変なことだったからである。経済的な苦境のために自分の工房を García Torres に売り払うことになってしまった Mariano Galván の例を出すまでもなく、すべての出版者がうまくいっているわけではなかった。この Galván から García Torres への工房の譲渡については、ここではあまり掘り下げないが、いずれにしてもこの売買によって García Torres は「新しい輸入活字や活版の意匠を」(同上書: 129)入手したのである。

García Torres は時間を無駄にしなかった。1841 年にはもっとも興味深い出版物の 1 つである、*El apuntador: semanario de teatros, costumbres, literatura y variedades*(プロンプター 演劇・風俗・文学・その他の週の催し)という演劇や演劇評論を豊かにした週刊誌を出した。Nava Martínez の研究対象となったのは 1838 年から 41 年までの間のみであるが、しかし、García Torres の情熱やエネルギーや能力がどれほど当時の出版界の発展をを推し進めたかを如実に表している。

6) "Prosperidad y quiebra: una vivencia constante en la vida de Mariano Galván Rivera"(繁栄と破産 Mariano Galván Rivera の人生の絶え間ない変遷)(pp.109-121)

ここで、Laura Solares Robles の論文から、メキシコの独立以後の最も重要な出版業者の 1 人であった Mariano Galván Rivera を破産に追い込んだ経済的苦境について短くまとめてみる。

この論文は、具体的に、当時の出版業者の直面した問題を正確に突いている。

まず、Mariano Galván Rivera は、書店主としてスタートし、後に、印刷と出版の道を選んだ。その店は「まさに、メキシコ市の中心部にあった」(同上書: 111)。1823 年か

らは、読者に「面白くて話題性のある作品」を提供するようになった。

Galván Rivera は、独立後すぐにメキシコの出版界に現れたというだけではなく、「『メキシコ版』出版物」の販売促進に力を入れたという点で、特別な位置を占めていると言える。例えば、それらは 25 巻の聖書(メキシコ人の手による、最初の解説入りの版)や、いままで紹介されていない新しいレシピを集めた料理事典である *El nuevo cocinero mejicano*(新しいメキシコ料理)、*Ilustración del Derecho Real de España*(スペイン王権法知識)、*Diccionario razonado de legislación civil, penal, comercial y forense*(民法、刑法、商法解説事典)のようなものであった。この最後の 2 点は当時の司法関係者の役に立つように考えられた「数多いばらばらの文献で、かつ、古典スペイン語で書かれていたもの」を、同時代のスペイン語にして集約することで、参照できるようにしたものである。(同上書: 113)。

Galván Rivera の仕事は、当初は大変上手く行っていた。しかし、1835 年に政府に 120 レスマ(1 レスマ=500 枚)を売ったが、政府が期限までに代金を支払わなかったことが、彼の経済状態を狂わせることになる。Solares Robles によれば、Galván Rivera は彼の他の商売を危険に晒すような借金をせざるを得なくなったのである。

また、Solares Robles が発見した法的文書の中に、Galván Rivera が 1837 年に、ある中間業者が「ドゥランゴ市に届けるべきであった一箱の書籍」を届けなかった件で訴訟を起こしているものがある。すなわち、書籍の販売は危険を伴うものであった。

Galván Rivera は、メキシコ全土(Puebla, Jalapa, Veracruz, Orizaba, Oaxaca, Valladolid, San Luis Potosí, Zacatecas, Querétaro および Guadalajara)で商売を展開していたが、どうやら、その中間業者にはあまり信頼ができない者もいたようである。

これらすべてが積み重なって、Galván Rivera は破産に追い込まれた。住居兼仕事場を追われ市の中心にあった書店を失い、妻の経営していた商店まで失った。

Othón Nava Martínez の論文で見たように、Galván Rivera が破産したとき、García Torres がその機会に飛びつき、彼の工房を安い値段で手に入れた。そのうえ「ひどく厄介な条件を付けた」のだが、その中には今後、彼が出版する全てのものを García Torres に受注させる条件が含まれていた。

この条件のため、Galván Rivera は、García Torres の工房以外のところで、有名なカレンダーも刷ることができなくなり、それ自体が、彼にとって、大きな制約であった。しかし、Solares Robles が記すように、ここで運命が好転し、今度は García Torres が「Galván の工房を買うにあたっての支払いに窮し、そのおかげで[Galván は]カレンダーを刷る権利を取り戻し、そのことが、彼の失われた資産の一部を回収することにつながった」(同上書: 119)。Solares Robles によると、1840 年代は Galván Rivera にとって最悪であったが、50 年代に入ると徐々に状況が上向いてきたという。というのも「1849 年から『カスティリア語文法と綴り(*Elementos de gramática y ortografía castellana*)』や Ripalda 神父著の『新版公教要理(*Nueva edición del catequismo*)』のような(権威ある)書物の出版権

を取得していたことで」（同上書: 120）1851 年には破産状態からかなり回復していた。それは、政治的な理由で突然の国外追放命令を受けた、旧知で恩義のあるカタルニア人印刷職人 Rafael de Rafael y Vilá の頼みを受け、彼の借金の保証人になることができたほどであった。

Solares Robles はこの論文の中では、Galván Rivera の人生についてそれ以上を語っていないが、モラ研究所 2003 年発行の *Constructores de un cambio cultural* の中で、1876 年に他界した Galván の人生について詳細に記している。

7) "Rafael de Rafael y Vilá: impresor, empresario y político conservador" (Rafael de Rafael y Vilá 保守的な出版者かつ政治家) (pp.157-167)

Javier Rodríguez Piña は保守主義者のスペイン人編集者 Rafael de Rafael y Vilá の波乱に富んだ人生について調査している。Galván Rivera に関する前述の論文で、彼が Rafael y Vilá がメキシコを去るにあたり身元引受人となったことを知ったが、この彼の時ならぬ出国や彼のメキシコに来た動機を Rodríguez Piña の調査によって知ることができる。

Rafael de Rafael y Vilá は 1843 年に、初期のメキシコ人出版者の 1 人である Ignacio Cumplido からの仕事の誘いによる招待で来墨した。彼らは Rafael y Vilá がすでに「12 歳の頃からバルセロナの印刷業界で働いており、活版印刷と版画においては高い技術を持っていた」（同上書: 159）エキスパートであったにもかかわらず、その「活版印刷技術をより完成させるために」（同上書: 158）ニューヨークにいたときに知り合った。

Cumplido が彼を招待した時にはニューヨークにすでに 5 年にわたって在住しており、ある新聞のディレクターをつとめ、また出版工房の所有者でもあった。

Cumplido には彼の価値がわかっていたため、素晴らしい条件を提示した。それは月 100 ペソの俸給、Cumplido 自身の邸宅への居住、Cumplido の出版工房のディレクターとなって、一銭も投資することなしにその収益の半分を得るというものだった（同上書: 159）。

Rafael y Vilá はその誘いに心を惹かれ、条件を呑んだ。Rodríguez Piña によれば、家族とともにメキシコに移住するまで、Cumplido の依頼で「Cumplido が最初に購入した印刷機械と、それを使うための専門職人」（同上書: 159）を揃えるために 7 ヵ月がかかった。

しかし、メキシコに到着してわずかの間に、Rafael y Vilá と Cumplido の間に衝突が生じた。彼らの関係は 2 年（1843～45 年）しか続かなかったのである。Rafael y Vilá は、「自分の利益を犠牲にしてきたのに」、約束は「何 1 つ守られなかった」。一方で Cumplido は、「自分の邸宅に食客として招いていたのに」、恩知らずにも「メキシコで新たな庇護者を見つけて自分に背を向けた」（同上書: 160）とそれぞれに主張する。Cumplido の言う新たな庇護者というのは、保守派の富裕な政治家 Manuel Diez de Bonilla のことで、彼の資金提供で、Rafael y Vilá は *El universal* 紙を 1848 年に創刊した。

このかつての仲間同士の敵対はすさまじいものであった。新聞紙上で敵対し、法廷でも敵対し、まったく正反対のイデオロギーの政治団体として闘った。Rafael y Vilá は大

統領候補の Mariano Arista をボイコットしようとした罪により、刑務所に入れられた後、最終的に 1851 年に国外追放となった。

Rodríguez Piña はこの件を自らの論文で詳細に述べている。Rafael y Vilá が、Cumplido と破局し、新しい庇護者の政治家を見つけるまでの間、彼は、1845 年に Galván Rivera と組んで仕事をした(すでに書いたように、Galván Rivera は後に彼の追放の際の身元保証人となっている人物である)。この 1845 年には Galván Rivera は破産状態だった。彼の最愛の書店も邸宅も印刷工房も版権も全てを失っていたのである。しかし、Rafael y Vilá と組むことで、幸運が回ってきた。いったん García Torres に譲渡せざるを得なくなっていたカレンダーの版権を取り戻し、スペイン人の熟練した印刷技術者によって、*Calendario Galván* として現在も発行され続けているカレンダーを出すことができるようになったのである。

Calendario Galván の販売は手堅いものだった。この収益を折半することで、双方の利害が一致し、こうして共に窮地から脱出できたのである。1846 年、Rafael de Rafael y Vilá は Cumplido に対する借金を払い、投資を増やした。1849 年には Galván は他の版権も手に入れ、経済的にかなりの回復となった。1848 年以後、2 人は共同経営をやめたが、すでに共に経済危機は脱出していた。後に Rafael de Rafael y Vilá は別の経済的・政治的危機に陥るが、それに関してはここでは触れない。

1852 年に国外追放された Rafael y Vilá だが、保守派が政権に就いた 1852 年に再びメキシコへ戻ってきている。その後の彼の生活は非常に上手くいった。彼は保守政権下で優遇され、まず、ニューオリンズの領事に任命され、その後、ニューヨーク領事、最後にはアメリカ合衆国全土の総領事に任命された。その上、メシージャ条約の仲介(ガズデン購入。1853 年、現在のアメリカ合衆国アリゾナ州南部およびニューメキシコ州にあたる 7 万 7700 キロ平方メートルの地域をメキシコよりアメリカ合衆国が購入した出来事)もおこなっている。その後、彼は再びメキシコに戻り、全ての資産を売り払い、スペインに帰国した(同上書: 166-167)。

8) "Ignacio Cumplido: un empresario a cabalidad" (模範的な印刷業者 Ignacio Cumplido) (pp.145-156)

María Esther Pérez Salas は、出版者としての Ignacio Cumplido の性格について論じている。彼女は出版業者である Cumplido が円滑な業務遂行のために 1843 年に策定した社内ルールについて、また友人である León Ortigosa との間に交わされた、1849 年から 1860 年にかけての私信における出版者としての内容を分析した。

Cumplido は非常な完璧主義者で、極端なほど物を大事にし、大変な理想主義者で、かつ進取の気性に富む人物であった。彼は、「同時に複数の場所に存在している」(同上書: 149)かのように思えるほど活動的であり(常に動き回っており、仕事の進行を見守りつつも他のあらゆる場所で見かけられた)、勤勉であり(ひとときでも休んでいる従業

員を見ることは耐えられず)、整理整頓に厳しく(あらゆるものが決まったところに配置されていた)、仕事へ愛着を持ち(質の高い仕事を速やかにおこなった)、節約につとめ(すべてのものを再利用していた)、教育や文化に対する信念(メキシコ人に外国の事柄を知らしめることに努力を惜しまなかった)を持ち、新しい技術の導入に意欲的であった(自らの *El siglo diez y nueve* 紙の印刷のために、シリンダー型の印刷機を最初に輸入、導入した)。また、サービス精神に富み(彼は読者に技術の高い石版イラスト入りの新聞を提供した最初の出版者の 1 人である)、信頼できる人間関係の構築力(国内と北米に121 に及ぶ販売拠点を持っていた)、すぐれた営業能力(彼自身の新聞のスペースを使って魅力的な広告を作り、読者を引き込んだ)を持っていた(同上書: 149-155)。

Cumplido はまさにこの仕事のために生まれてきたような人物であり、実際、メキシコ出版界のリーダーの 1 人となっているが、一方ではスペイン人出版者についての論文で見てきたように、敵を作ることもあった。Cumplido と彼の周囲の出版業界に関する研究は、個人的にも商業的にも彼のいろいろな側面を明らかにしている。

9) "Una imprenta floreciente en la Calle de la Palma número 4"(**パルマ通り 4 番地に花開いた印刷工房**)(pp.131-144)

Laura Suárez de la Torre は、メキシコ市パルマ通り 4 番地の出版工房の主であった José Mariano Fernández de Lara を論じている。この論文はこの保守派陣営に属した個性的な出版者の生涯と思想についての幅広い視点を与えてくれる。

Fernández de Lara は銀細工師の家庭に生まれたが、印刷業に携わることを決意した。彼のキャリアは 1820 年代、サン・ホセ・デ・レアル 2 番通りでの「非常に粗末で安価な小冊子」の製作から始まった(同上書: 133)。

1840 年には、自分の住んでいた建物の 1 階にあって「パルマ通り 4 番地の印刷屋」と呼ばれていた出版工房を買い取った。この工房は既に何人もの所有者のもとで稼働していた。Fernández de Lara は 1860 年代の終わりまでここで操業していた。

彼の印刷物は「非常に多様性のあるテーマを扱い、その入念で質の高い仕事ぶりで、同時代のもっとも有名な印刷業者にもひけを取らないものであった」(同上書: 133)。当初は「手作りの零細工房」(同上書: 134)であったが、後には小さな企業として「植字工や植字校正工、結束工、謄写工、翻訳家、校正者、石版職人、製本職人」(同上書: 134)らを雇用するほどになっていた。

1842 年には、政府機関のパンフレットや教会の説教や供養のための小冊子、法律や法令慣例の書籍なども請け負うまでになった。しかし、彼の仕事の中でもっとも注目すべき点は、当時の保守主義派の知識人の重要な作品を世に出したことである(その中には極右派の Lucas Alamán も含まれていた)。こうして王政主義者の思想を宣伝したが、これは商売として受けていたと言うより、彼自身がそのような思想を持っていたからである。そのために García Torres の *Monitor republicano* 紙や Cumplido の *Siglo diez y nueve*

紙と敵対する *El tiempo* 紙を創刊した。その当時、王政主義的な新聞を発行すること自体に困難があった。Suárez de la Torre によると、王政主義者の側に立つような文章を組むことを拒否した職人もいたうえ、販売できる場所も限られていた。さらには共和制派の新聞から絶え間なく叩かれていた(同上書: 140)。

一方、Fernández de Lara は文学の出版にも力を入れており、Jacques-Henri Bernardin de Saint-Pierre が 1787 年に発表した *Paul et Virginie*(ポールとヴィルジニー)などのような作品を翻訳し、世に出した。このような文芸作品が好評を博したため、Fernando Orozco y Berra や Isidro Rafael Gondra、Casimiro Collado といった当時のメキシコの主要な作家の協力を得て、*El liceo mexicano* という本格的な文芸誌を創刊した(同上書: 142-143)。

Suárez de la Torre は、Fernández de Lara の製作した印刷物は美しく挿画されており、同時代の他の出版・印刷業者と比較すると印刷のクオリティも高かったとはいえ、Fernández de Lara には決して、工房を近代化しようとする発想はなかったとする。しかし、そのことで当時の著名な知識人達の信頼を失うことも、手稿を委ねることを躊躇わせることもなかった。これらの彼の工房で印刷された文書は、今日ではメキシコの歴史を語るに欠かせないものとなっている。

10) "De las tertulias al sindicato: infancia y adolescencia de las editoras mexicanas del siglo XIX"(サークルから組合まで 19 世紀メキシコの女性出版者たちの創世記)(pp.65-77)

Lilia Granillo Vázquez は 19 世紀の出版界での女性の役割について研究している。この論文の構成の前半は、女性向けの雑誌が短命に終わったことに関して、女性たちがネガティブな役割を果たしたとする男性出版者たちの言い分を集め、後半では、これらの男性出版者たちが主張しているように、女性が文化に対して無関心であったわけではないということを示している。実際、女性たち自身が長期にわたる女性向けの雑誌を創刊し、製作し、それらが読まれていたからである。

Granillo Vázquez は男性出版者たちの、女性読者に対する愚痴を数多く集めている。たとえば、

El iris 編集長:

> 「私達の雑誌を定期購読してくださる女性は、わずか 7 名しかいらっしゃいませんでした」(同上書: 72)

Semanario de las señoritas 編集長:

> 「共和国のお嬢さん達は無関心であるか、もしくはまったく好意的に評価してくれなかった。すなわちこの種の出版物は彼女らの興味を惹かず、たとえ何らかの注目があったとしても、それはファッションの流行についての記事か暇つぶしに小説に目を通すか詩をたどたどしく読む程度だった...」(同上書: 73)等々。

Calendarios や *Panoramas*、*Presentes amistosos* といった若い女性向けの雑誌は「経費がかかる割に」儲からず、「1 年から、せいぜい 3 年程度」で廃刊となった(同上書: 72)が、その一方で、彼女の研究は、女性たちが読み物に対して無関心であったという男性

側の印象は事実ではないことを示している。むしろ、その反対であった。多くの女性たちは「家庭で文芸サークルを開き、そのことによって、こういったサークルはプライベートな空間から公開の場となり、男性とも共有されたのである」(同上書: 74)。彼女たちの文化への関心は高く、「学校を創立し、定期刊行の雑誌を発行するまでになった」(同上書: 74)。

この論文は、女性編集者たちの氏名のリストのほかに、メキシコ各地(Yucatán, Jalisco, Colima, Tabasco, Sinaloa など)で誕生した女性向け雑誌のリストを挙げている。すなわち、この現象は 1 ヵ所に留まるものではなかったのである。それらの例の中には、*El correo de la mujer*(10 年)、*El albúm de la mujer*(7 年)、*Violetas del Anáhuac*(2 年)など、2 年から 10 年にわたって存続した雑誌もある。

Granillo Vázquez がその名を挙げた多くの女性編集者たちは、「弱くも非科学的でもなかった」(同上書: 76)。彼女らの中にも、女性労働者や女性教師のために政治的な意見を発言し、政府と衝突した者(*El periódico de las señoras*)もいる。「Manuel González 大統領(1880-1884)を批判して、もう少しで国外追放になるところだった」(同上書:77) Laureana Wright de Kleinhan のことも取り上げている。

彼女の論文は多くの男性知識人の話には注意しなければならないことがあると結論している。なぜなら、それが常に現実を反映しているとは限らないからである。

11) "José Justo Gómez de la Cortina frente a la lengua oficial de México"(メキシコの公用語問題と José Justo Gómez de la Cortina の立場)(pp.374-384)

出版の歴史は言語の歴史と結びつく。特にメキシコのような多言語国家においては、出版と言語の関係は重要である。Bárbara Cifuentes は、メキシコの公用語が形成される過程で José Justo Gómez de la Cortina が果たした役割と、スペイン語圏での意志交換言語として、カスティリア語を用いることについての議論の中でのメキシコ知識階層の参加について興味深い研究をおこなっている。

「コルティナ伯」として知られる「著名な言語学者」(同上書: 374)の José Justo Gómez de la Cortina は同時代人に誤解されていたものの、19 世紀前半のメキシコでもっとも卓越した知識人の 1 人であった。コルティナ伯は、彼の同時代人に対し、スペイン語の文法に非常に忠実であることを奨励していた。しかし、彼の完全主義的情熱は、彼の話を聞いた人々には過度にスペイン的であることを要求されているかのように解釈されており、独立を達成したばかりの時代におけるそのような態度は、反愛国的に見られたのである。

Cifuentes は、「コルティナ伯についてあまり研究されていない観点は、彼の言語学者としての仕事であり、それゆえに「コルティナ伯自身が押し進めた研究と彼の論文は二重の意味で価値がある」、そして「1 つは、国家の言語研究に携わったメキシコ人の最初のグループの中で、いかなる手法が用いられてきて、いかなる期待を持たれていたか

ということである。もう1つは、長い時間をかけたプロジェクトの中で、啓蒙主義の存在の明確な痕跡があること、すなわちメキシコの国家的言語とはなにかを追求し、定義することである」(同上書: 375)とする。

Cifuentesによれば、1770年4月16日、スペイン王カルロス3世が「カスティリア語がインディアス地区(ラテンアメリカ)、近隣諸島およびフィリピンでの公用語であるべきである」(同上書: 註7)と定めた時、ヌエバ・エスパーニャの独立政府もこの前提に何ら疑問を持たなかった。しかし、コルティナ伯は、カスティリア語を大事にするということはイベリア半島人だけの責任ではなく、メキシコ人の責任でもあると考えた(だからこそ科学研究などの分野でもフランス語や英語を中心に使うのではなく、カスティリア語の使用を推進した)。

植民地時代は、カスティリア語を護るのはスペイン王立アカデミー(Real Academia Española: RAE)の仕事であった。しかし、独立以後、スペイン語系アメリカ大陸人も同じ権利と責任を持ってカスティリア語の研究に取り組むべきであるとする、RAE と異なる視点を持つ研究者たちが登場し、合理的文法主義者(gramáticas racionalistas)だったコルティナ伯と対立した。その中にはバレンシア人の Vicente Salvá がおり、(啓蒙主義の新しい出版物を新大陸へ輸出した業者のおかげで)彼の著作 *Gramática de la actual lengua castellana según se habla ahora*(現在の話法によるカスティリア語文法)はベストセラーとして版を重ねた。

この文法書は新大陸で大成功を収め、Salvá の死後も売れ続けた。Salvá はきわめて開かれた考えの持ち主で、カスティリア地方の言語とラテン文法にこだわった RAE とは違って、新大陸の啓蒙主義的学者の使っていたカスティリア語も問題なく受け入れていた(同上書: 380)。

コルティナ伯は、しかし、それに反対であった。カスティリア語は「本来の規定と、人間が思考を構築し、意思疎通するために必要な論理」(同上書: 381)に従うべきであるとした。

彼の意見では「弁論術的、修辞学的、文法学的な分野においてもっとも権威があるのは」Gaspar de Jovellanos、Alvarez Cienfuegos、Antonio de Company、そして、Ignacio Luzán(同上書: 382)であるとする。彼にとってカスティリア語に関連して考えるべき根本的な3つの必要条件は、

① 「スペイン語世界で分かち合い、伝承されるべきものであること」(同上書: 383)
② 「力強く動的なものであること」(同上書: 384)
③ 「スペイン語話者のコミュニティの間での考えの交換において、言語が、最大限に流暢に通用し、安定性があること」(同上書: 384)であった。

12) "Las armas de la Ilustración: folletos, catecismos, cartillas y diccionarios en la construcción del México moderno"(啓蒙主義の武器：近代メキシコを築く上での冊子やカトリックの教理問答書や初歩的な読本や辞典)(pp.431-444)

植民地時代の後の近代メキシコを築く礎となった革命思想の普及の中で使われた冊子やカトリックの教理問答書や初歩的な読本や辞典の果たした役割について、Arturo Soberón Mora が論じている。この研究では、独立を経て、メキシコの知識階級が「共和国国民としての権利や義務に関する知識を民衆に教える」(同上書: 434)ために、いかにして平易な言葉で書かれた文書を作成したかについて光を当てている。

Soberón Mora によると「Fernández de Lizardi 全集の 14 巻の作品のうち、4 巻がこの種の小冊子ものであることから見ても」(同上書: 433)、この種の印刷物の重要性は明らかである。彼はまた、フランスでモンテスキューが彼の時代にやったように、この時代のメキシコで「カトリックの教理問答書や識字教育のための読本の教育的な枠組みを生かして、しばしば、革命思想的な内容を盛り込んだ」(同上書: 433) Esteban de Antuñano についても記している。

メキシコにおいて、300 年にわたる植民地時代のカトリックの厳しい強要の後で、教理問答集のような宗教的な文書を政治的な目的で使うことはタブーであった。最初にこの危険を冒したのは、先の Fernández de Lizardi で 1827 年のことであった(同上書: 434)。

その後、他の啓蒙主義者たちが後に続き、1831 年に「新共和国で人々の精神に影響を与えた最初の教理問答」(同上書: 435)であった *El catecismo político de la Federación Mexicana*(メキシコ連邦における政治的教理問答)が José María Luis Mora によって出版された。この文書では、作者は「政府の行いが明らかに国民に害をもたらす場合には、民衆は叛乱を正当化することができる」(同上書: 437)、すなわち、政府が抑圧する場合、国民は暴力をもって対抗することが有効とされる。

それに続いて、政府の専横に対する民衆の権利について、まったく異なる立場の政治読本が出版された。それらは Manuel Eduardo de Gorostiza の *La cartilla política*(政治読本)(1833 年)や Cortina 伯の *La cartilla social*(社会読本)(1836 年)であった。前者は「政府の民主的な形態を褒め称え、その主要な長所や機能について解説した」(同上書: 436)ものであり、他方は「民主的な形態を理想の政府として描くのではなく、本来の主権という言葉を避けて、市民帝国という言葉を用い、その目的は読者の気持ちを彼自身が傾倒する議会制君主主義に向けようとする」(同上書: 436-437)、正反対のものであった。

すなわち、それぞれの著者は大衆に影響を与え、極端なリベラリズムから君主制までに至るそれぞれの政治的理想で大衆を教育しようとしたのである。

Soberón Mora は「近代になって国家は、国民に対する教育を普及させるという役割を課せられたが、それを放棄するはずがなかった。なぜならそれは、その(国家の)価値観にもっとも都合の良い方針を推し進めることができるということだからである」(同上書: 437)。そういう意味で、Lancasteriana de México 学校(1822～42 年：ランカスター教

育法を採り入れた学校)が Cortina 伯の *La cartilla social* を採り入れたのは不思議なことではなかった。明らかに政府は保守的な価値観を護り、常に大衆が権威に徹底的に服従することを選んだのである。

Soberón Mora によれば、メキシコでは多くの啓蒙主義者が社会を近代化しようとしたが、出来る限り、従来の社会秩序に傷をつけまいとし、また、宗教の役割に疑問をはさまれないようにした(同上書: 438)。フランスの啓蒙主義者たちと違い、メキシコ人は辞書を選び、百科事典に手をつけなかった。なぜか。それはいずれも革命的な時代の要請に応じて、簡潔で明瞭で迅速な方法で、主義主張を広める方法であったが、辞典は百科事典に比べラディカルではないからだ。辞書は「世界の知識を知る手段」ではなく、仕事上のシンプルな道具であるからである(同上書: 438)。

Soberón Mora は、1845 年と 1856 年に作成された 2 冊の辞典を比較している。1 冊は Vicente García Torres の出版社で発行された Cortina 伯の *Diccionario de sinónimos castellanos*(カスティリア語同義語辞典)で、もう 1 冊は、Rafael de Rafael の出版社から 1853 年から 1856 年の間に発行された、複数の保守系作家による *Diccionario universal de historia y geografía*(万国歴史地理辞典)である。前者では政治的なテーマを避けており、後者では明らかに政治に焦点を当て、国の問題のすべてを共和国派の責任にしている。著者はその偏りと限界にかかわらず、この 2 冊は共に「地理的・文化的特色の普及を通じて、メキシコに近代主義の顔を作っていくことで、いまだに植民地という考えにとらわれ続けているという烙印から民衆を解き放つという、啓蒙主義者たちの努力の一端ではあった」(同上書:444)と述べる。前者はメキシコで使われた言葉の詳細を研究したものであり、後者は「はじめて、国家の領土について地理の近代的な目録を民衆に知らしめた」(同上書: 444)のである。

B. *Constructores de un cambio cultural: impresores-editores y libreros en la Ciudad de México 1830-1855* (文化的変遷の創造者達—1830 年から 1855 年の間におけるメキシコ市の印刷・出版業者および書店)

本書はモラ研究所がメキシコにおける印刷文化の形成において 19 世紀最も影響力があったと考えた 5 人の出版者(Vicente García Torres、Mariano Galván Rivera、Rafael de Rafael y Vilá、Ignacio Cumplido、José Mariano Fernández de Lara)の生涯とその出版活動に関する調査研究の成果である。各論文の内容は、すでに上記のシンポジウム記録(Suarez de la Torre, coord. 2001)の紹介で扱った 5 論文の抄訳(本稿 pp.13-19)に重なるところが多いので、本稿では改めて解説は行わない。なお、本書の構成については、巻末の付録資料を参照されたい。

C. *"Impresiones de México y de Francia"*（メキシコとフランスの印刷）

引き続き、Lise Andries と Laura Suárez de la Torre の共同編集による *Impresiones de México y de Francia* について紹介する。この論文集に収録された 16 篇の論文は、①印刷物の流通と頒布、②新聞そのものを対象とする研究、③「他者」の表象と政治的思想という 3 つのテーマに分類される。以下では 16 篇のうち 4 篇を取り上げるが、いずれも原文がフランス語であり、フランスを中心とする欧州諸国の印刷物が当時のメキシコ印刷文化に与えた影響を知る上で重要である。最初の論文はフランスのカレンダーがメキシコのカレンダーに与えた影響、次はフランス・イギリス・メキシコ・スペインのそれぞれの定期刊行物が相互に与えた影響を扱っている。第 3 はメキシコとフランスにおける新聞連載小説について、第 4 は 1830 年から 1850 年にかけてのメキシコ市・ロンドン・パリにおける挿絵入り新聞について考察したものである。

1) "Los calendarios mexicanos y 'el bello repertorio de almanaques ilustrados ofrecidos por Europa y sobretodo por Francia'"（メキシコの暦と「ヨーロッパ、とりわけフランスから採り入れられた美しい絵入り暦」）(pp.65-86)（原文フランス語）

ここでは、19 世紀メキシコでヨーロッパの暦がメキシコの暦に与えた影響についての Miguel Rodríguez の論文を要約する。この研究によると、メキシコの最初の暦は、暦印刷のスペイン国王特権を与えられた Felipe de Zuñiga y Ontiveros が 1753 年に発行したものである。Mariano Zuñiga y Ontiveros は、この特権を相続した一族の最後の 1 人だった。1821 年独立の到来と共に、メキシコの他の業者もこれに参入した（同上書: 66）。

Alejandro Valdés、José Mariano Mateos Guerrero、José Joaquín Fernández de Lizardi は、その最初の参入業者であり、それぞれ 1822 年、1824 年、1824～25 年に、暦を発売している。Rodríguez によると、これらの新しい暦は当初から「メキシコの歴史等に関する情報などが掲載されているものであった」（同上書: 66）。

最も有名な暦は、Mariano Galván によるもので、1826 年に発売開始されて、現在も発行され続けている。このカレンダーの長所は、日の出・日の入りの時刻だけではなく、カトリックの祝祭日や町の行事などについても記されていたことだった。

1830 年以来、この暦の影響で、名のある出版社は皆「年始めに最低でも 1 つの暦を出さなければならないような」状態になった（同上書: 66）。1836 年以前の暦にはイラストはなかったが、1842 年に José Mariano Lara が「暦に石版の技法を導入し」（同上書: 67）、45 年には Cumplido が「ヨーロッパで最も文化的な国々」（同上書: 67）で購入してきた原画を使って、出版物を飾ると表明した。それ以来、雪景色や暖炉のある冬の夜の挿絵のある暦が見られるようになる。暦の中で最初のイラストとして使われたのは 12 星座であった。

Rodríguez によれば、これらの初期の暦に関する緻密な研究は、「メキシコの印刷業界の発達を明らかにする」（同上書: 67）一助となるとする。

彼は、誰もがこの種の暦を入手できたことを当時の興味深い証言を引用して説明している。

Rafael de Rafael

「今日では、暦は、文明を護るものである。これは、単に民衆を楽しませるだけではなく、教育する役割も果たしている真の文学作品であり、要するに、富裕層の暇つぶしであるとともに、貧困層の図書館であり、書を持たない者にとっての事典である。」(同上書: 69)。

José Zorrilla:

「この非常に低価格で販売されている粗末な暦は、貧困層の人々の手にも届くものであり、民衆に行き渡り、田舎の農村や集落や農園には行商人によって運ばれた。その家にも、3 部や 4 部あった。」(同上書: 69)。

19 世紀の後半から暦の需要は加速した。暦はより洗練され、「農業従事者や女性や子供用に特化したもの」(同上書: 70) も生まれた。「1860 年代には、暦の実売数は最高潮に達した。この 10 年間に 450 種類を超え、1870 年代以後には 250 種類にまで落ち込んだ」(同上書: 71)。「この 60 年代には、暦の様式とテーマは多様性と豊かさに富んでいた」(同上書: 71)。出版業者たちは販売を増やすために工夫も用いた。ある業者は購入者が毎年そこの暦を買うように、サスペンス小説のテクニックを用いた。別の業者は 17 世紀ヨーロッパの素材を再利用した(同上書: 72)。また別の業者は恋愛もので購買層に訴えた(同上書: 73)。Rodríguez によれば、これほどの夥しい恋愛ネタはフランスにもなかったとしている。

Rodríguez は大量の滑稽ものや風刺ものがあったことも指摘している(同上書: 73)。メキシコではフランス以上に「暦は文学的な創造の場であった」(同上書: 73) のである。

「暦は本来、天を見て気象を予測するという重要な役割があった」にもかかわらず、19 世紀半ば過ぎから、ヨーロッパと同様にメキシコでも、暦の予報は、「より世俗的な占星術の次元に入った」と Rodríguez は指摘する(同上書: 74)。ノストラダムスがヨーロッパとメキシコでブームになり、「(エルナン・コルテスやモクテスマのような) 著名な死者を蘇らせ、あらゆる秘密を彼らから得ようとする」ような暦まで出現するようになった。

フランスの影響に関して言えば、暦にフランスに関するものを使うのは通例となっていた。19 世紀フランスの偉大な作家たちは「どこにでも顔を出した」。フランスからの翻訳ものが洪水のように溢れ、ナポレオンやオーギュスト・コントの実証哲学は必須であった。メキシコの針子はフランスの *grisettes*(17 世紀フランスの庶民女性) と重ねられ、暦の頁は *Les Français peints par eux-mêmes*(フランス人の自画像—19 世紀風俗百科—) から影響された版画を利用していた。もちろんフランス人の異国趣味も真似ていた (同上書: 77-83) 。

これらすべてにもかかわらず、Rodríguez はメキシコの暦の独自性は否定しがたいとする(同上書: 73)。「メキシコ人がメキシコと世界をフランスの眼鏡で見た」ことは事実であるが、同時に逆説的ではあるが、「これらのフランス由来の文章や版画や表象の助けで自国の社会的想像力を作り上げた」と彼は結論づける。

2) "Identités nationales et mondialisation médiatique: Étude de titrologie comparée Mexique, France, Grande-Bretagne, Espagne (1821-1861)" (国民的アイデンティティとメディアのグローバリゼーション) (pp.115-144)(原文フランス語)

Alain Vaillant は 1821 年から 1862 年にかけて、フランス、メキシコ、スペイン、イギリスに登場したさまざまな日刊紙について比較研究している。

この比較研究の目的は、どの国がメキシコの出版界に最も影響を及ぼしたかを知ることであった。19 世紀は 2 つの巨大な相反する勢力が共存する複雑な時代であったと Vaillant は解説する。すなわち、産業革命によって文化をグローバル化し、同一化しようとする力と、反対にフランス革命やアメリカ独立によって、「民衆の抵抗運動や愛国的な叛乱をつきものとする」国民的なアイデンティティを肯定する力である(Vaillant 2009: 115)。彼は「新聞はこの並行する 2 つのプロセスの中心に存在していた」(同上書: 115-116) ことを理解することが重要であるとする。

比較に入る前に、新聞の歴史を振り返り、19 世紀には 4 つの段階があるとし、最初は 18 世紀にそうであったような知識層や文学者たちの交流の場としての役割を終え、イデオロギー的な公の場での論議の場を開いた。第 2 に、内容が多岐にわたり、そのことによってブルジョア階級の需要に応えた。第 3 に価格が下がり、一般民衆にも手が届くようになった。そして、第 4 に「大衆のメディア文化の驚異的な発達」(同上書: 120-121) が起こったとする。

この一方で、Vaillant は、4 ヵ国の新聞の違いを説明する。

イギリスでは、報道の自由(1689 年)の結果、論評を掲載する新聞が生まれた (1717 年の *The Censor*、1722 年の *The London Post*、1788 年の *The Times* など)。フランスでは 19 世紀の初めに、「自由で、戦闘的で、攻撃的な」新聞(同上書: 122)が、大変な熱狂のもとに大衆に受け入れられたが、その後、弾圧的な法律が現れたことで、出版者達は抵抗の形として、文化面に力を注ぐようになった。メキシコでは当時の政治的・社会的変化を反映し、新聞は 2 つのイデオロギーに分かれることを余儀なくされたが、その一方では独立後の新しい文化的アイデンティティの形成のための媒体として役立った。スペインでは社会的な混乱が大きく、新聞は「想像される以上に弱いものだった」(同上書: 123)。

Vaillant は、1821 年から 1861 年までの間にメキシコで発行された 162 の印刷物をサーベイし、新聞の命名について分析した。以下がその一部をまとめたものである。

	新聞数	例
イギリス、フランス スペイン、メキシコの 4か国で同名の新聞	54	*The London Post*(イギリス 1722 年) *Le courrier francais*(フランス 1789、1820 年) *El correo general de Madrid*(スペイン 1820 年) *Correo de la federación mexicana*(メキシコ 1828 年)
フランス、スペイン メキシコの 3 ヵ国で 同名の新聞	37	*L'illustration*(フランス 1843 年) *La ilustración*(スペイン 1849 年) *La ilustración mexicana*(メキシコ 1851 年)
メキシコとフランスにのみ 存在する新聞名	13	*La minerve française* (フランス 1818 年) *La minerva mexicana* (メキシコ 1822 年)
メキシコとイギリスにのみ 存在する新聞名	2	*The Liberal: Verse and Prose from the South* (イギリス 1822 年) *Diario liberal de México* (メキシコ 1823 年)
メキシコとスペインにのみ 存在する新聞名	9	*La sombra de Moctheuzoma Xocoyotzin* (メキシコ 1834 年) *La sombra de Nino* (スペイン 1868 年)
メキシコにのみ存在する 新聞名	46	*Los Padres del Agua Fría: periódico hidropático, medicinal y utilísimo para los reumatismos políticos* (メキシコ 1855 年)

（出所）Vailiant(2009), pp.131-144 を基に筆者作成。

さらに詳細に Vaillant は、欧州諸国との影響についても述べている。

影響	例
かなり昔のスペインから影響を 受けたメキシコの新聞名	*Gaceta de Madrid*(スペイン 1697 年) *Gaceta imperial de México*(メキシコ 1821 年)
同時代のスペインから影響を受けた メキシコの新聞名	*El tiempo*(スペイン 1833 年) *El tiempo*(メキシコ 1834 年)
スペインの民衆がナポレオン軍と 闘っていた時代のスペインから 影響を受けたメキシコの新聞名	*El imparcial*(スペイン 1812 年) *El imparcial*(メキシコ 1837 年)
スペインに影響を与えた メキシコの新聞名	*La voz de la patria*(メキシコ 1829 年) *La voz de la patria*(スペイン 1868 年)
イギリスやフランスから影響を 受け、後に、スペインに影響を 与えたメキシコの新聞名	*The Friend of Youth, and Children's Magazine*(イギリス 1811 年) *L'ami de la jeunesse et de la famille*(フランス 1823 年) *El amigo de la juventud*(メキシコ 1823 年) *El amigo de los niños*(スペイン 1849 年)
フランスやスペインに影響を与えた メキシコ独自の新聞名	*El mosquito mexicano*(メキシコ 1834 年) *Les moustiques républicains*(フランス 1848 年) *El mosquito*(スペイン 1864 年)

（出所）Vaillant(2009), pp.131-144 を基に筆者作成。

Vaillant の行った比較からわかる結論としては、

・メキシコの紙名のうち、55%はイギリスの紙名とは関連がない(同上書:126)。
（その理由は、イギリス人は「フランス革命に共感していなかった」し、「ユニークな紙名を好まなかった」からである)(同上書:126)。

・メキシコとフランスは強い関連性がある。その紙名の 3 分の 2 が似通っている。
・メキシコは、とりわけフランスの革命期と7 月王政の間の時代に発行されたロマン主義派かつ共和主義的な新聞に親近感を抱いている(同上書: 120)。
・メキシコは単なる外国のモデルの模倣者ではなく、46 にも及ぶメキシコ独自の紙名があり、「限定された出版物とすれば、非常に多くの数」(同上書: 128)である。

3) "'Sous le trait': Identités nationales, politiques et médiatiques dans les feuilletons en France et au Mexique au XIXe siècle"(文化欄 19 世紀のフランスとメキシコでの "feuilleton"における政治、メディア、国家に関するアイデンティティ)(pp.147-164)

Marie-Ève Thérenty はフランスで誕生し、メキシコで受容された"feuilleton"(新聞紙面の下部に追加された拡大部)の歴史と文化的・政治的・メディア的影響について長文の研究をおこなっている。この論文は 19 世紀のほぼ 4 分の 3 の期間で、世界の新聞に 2 種類のパターンが共存していたというところから始まる。アングロサクソン系は日常の出来事をそのまま描写するのに対し、フランス系では日常の出来事に関して意見を述べるものであった。この後者のタイプの新聞は一目でわかる。第 1 面が上下に分かれているからである。上半分が政治を扱うのに対し、下半分は文学や文化的テーマを扱っており、この上部と下部は 1 本の線で区切られていた(同上書: 147)。

1799 年、*Journal des débats* 紙のオーナーが余分な税金を支払わずに紙面を拡大する方法を思いつき、第 1 面の下部にスペースを追加する。この下半分がフランスでは"feuilleton"と呼ばれるようになった。1836 年になって、初めてここに連載小説が掲載されるようになる。Thérenty によれば、「この種の最初の連載小説はバルザック(Honoré de Balzac)の『老嬢(*La vieille fille*)』で、Emile de Girardin の *La presse* 紙に掲載された」(同上書: 150)。1836 年から 1843 年にかけて、この"feuilleton"に掲載される連載小説は継続的に成功を収め、なかでも「1842 年 6 月 19 日から 1843 年 10 月 15 日まで連載されたシュー(Eugène Sue)作『パリの秘密(*Les mystères de Paris*)』は、最大のヒットとなった」(同上書: 150)。

フランスでは、新聞の"feuilleton"スペースの誕生と、デュマ(Alexandre Dumas)、スーリエ(Frédéric Soulié)、シュー、フェヴァル(Paul Féval)、バルザック、サンド(George Sand)といった人々の小説のブームが重なった。そして、1845 年、出版者たちが、この文芸・文化欄のみを目当てに新聞を購入している読者がいることに気づき、その重要性はさらに増した(同上書: 148)。

メキシコを含む多くの国で、このフランスのモデルが採り入れられたが、とりわけメキシコにおいては、この"feuilleton"スペースが、フランスの新聞に掲載された連載小説のスペイン語訳を掲載されるのに使われた(同上書: 147-148)。

ところが、メキシコでは誤って連載小説そのものが"feuilleton"と呼ばれるようになった。フランスでは"feuilleton"のために書かれた小説と、雑誌のために書かれたそれ以外

の小説には明快な区別が存在する。例えば、厳密な意味では、新聞のためではなく雑誌のために書かれた Manuel Payno の *El fistol del diablo*（悪魔のタイピン）は、フローベール(Gustave Flaubert)の『ボヴァリー夫人(Madame Bovary)』と同様に、"feuilleton"ではない(同上書: 148)。

Thérenty は研究の対象として 1841 年から 63 年を選んでいる。なぜなら 1841 年という年は、メキシコで *El siglo diez y nueve* 紙が創刊され、フランスでは"feuilleton"小説が誕生した年であるからである。そして、1863 年とはフランスがメキシコを占領し、一方でフランスの伝統的な"feuilleton"小説が終わりを告げた年である[8](同上書: 149)。Thérenty の調査によると、1841 年には Ignacio Cumplido の *El siglo diez y nueve* 紙が、最初のフランス小説[9]のスペイン語翻訳版を掲載した(同上書: 151)。しかし、同紙が翻訳小説のために"feuilleton"スペースを利用するのは、1845 年 9 月 16 日からシューの『パリの秘密(*Les mystères de Paris*)』を連載するようになってからである。これらの *El siglo diez y nueve* 紙の翻訳小説は、読者が毎回切り取って本にできるような仕様に工夫されていた。1846 年には García Torres の *El monitor republicano* 紙が、そのアイデアを採用し、さらに完璧にした(同上書: 152)。Thérenty によると、この新聞の連載面を切り取って本にするという発想は、メキシコだけのものだった(同上書: 151)。フランスでは"feuilleton"スペースは小説だけではなく、シャトーブリアンやジョルジュ・サンドのような人たちによる年代記や旅行記、日記などにも使われていた。注目に値すべきなのは、この"feuilleton"スペースに書かれていることは、一面上半分で論じられている政治的なテーマと無縁ではなく、しばしば、その内容は上の政治面に対する皮肉や隠喩であることもあった。Thérenty によれば、経済的な動機により、保守的な新聞がリベラルな内容の小説を掲載することもあったのである(同上書: 153)

メキシコの場合は同じような現象は起こらなかった。むしろその新聞のイデオロギーを強調するために使われたのである。付け加えると「フィクションであることへの執着はヨーロッパほどではなかった」(同上書: 154)ため、この"feuilleton"スペースに歴史ものを選ぶことが多かった。

Thérenty は *El siglo diez y nueve* 紙と *El monitor republicano* 紙が掲載した作品一覧をその論文で紹介しているが、ここでは割愛する(同上書: 154-156)。

この論文の分析は非常に興味深い。「リベラル系の新聞が"feuilleton"スペースを、他者すなわち外国であるフランス文学の紹介に過剰なまでに費している。とりわけ大デュマとユージェニー・シューの作品を掲載しているが、それは政治的な理由である」(同上書: 157)。*El siglo diez y nueve* 紙の社長は、バルザックについてはその文体の難解さから避けたと Thérenty は考えている。

El universal 紙も"feuilleton"スペースを同じように用いたが、保守派新聞として逆の方向に向けてであった。フランス人作家を避け、スペイン人作家やイギリス人作家を主に取り上げたのである。歴史物を好み、フィクションは重視しなかった。Thérenty はこち

らも完全なリストを紹介しているが、ここでは割愛する(同上書: 157-158)。

この研究の結果、当時、*El universal* 紙と *El siglo diez y nueve* 紙、*El monitor republicano* 紙は、互いにその"feuilleton"に掲載したものを貶し合っていたことが明らかになっている。このことがメキシコにおいては"feuilleton"スペースはフランスと違うものであったことがわかるのである。すなわち Thérenty によれば、「保守派とリベラル派とのあらゆる論争がそこで展開されていた」(同上書: 158)。

フランスではまだ隆盛を極めていた"feuilleton"スペースは、メキシコでは 1861 年頃から姿を消し始める(読者のフィクションに対する熱狂は冷めていなかったが、"Rocambole"風のものに移行していた)。この違いはメキシコ人が文学に対して興味を失ったことを意味するわけではない。というのもメキシコ文学は 4 面にある「その他」欄に掲載され続けていたからである。本来メキシコのものではないヨーロッパ文学は、シンボリックにイデオロギーの道具として、いつでも切り取られるような形で紹介され、一方でメキシコ文学は 8 頁の新聞の中央である 4 面の「心臓部で育まれてきた」と、Thérenty は語っている(同上書: 162)。

また、彼女はこの時代のフランス小説の「翻訳」は、正確さより翻案的な要素があるものだったが、それは翻訳家が自国民の好みに合うようにせざるをえなかったからであるとする(同上書: 163)。

Thérenty は、この受容の問題(すなわち、ヨーロッパの作品のうちで選ばれたものと選ばれなかったものの差異)と再適応の問題(ヨーロッパの小説のある登場人物がメキシコ人にどう感情移入されたかということ)をより深く追求していくべきであるとして、この論文を終えている。

4) "Londres-Paris-Mexico ou la naissance de la presse périodique illustrée (1830-1850)" (**ロンドン・パリ・メキシコ、挿絵入り新聞の誕生[1830-1850]**) (pp.189-218) (原文フランス語)

Marie-Laure Aurenche のフランスとメキシコにおけるイギリスの *Penny Magazine* の影響についての研究を要約する。

Penny Magazine は 1832 年のロンドンで誕生して、大変な人気を博し、わずか 3 ヵ月で 10 万部を売り上げた雑誌である。フランスでは翌年、似た雑誌(*Magasin pittoresque*)の流通が始まり、12 ヵ月で 6 万部を売った(同上書: 206)。

Aurenche によると、1833 年にフランスの職人は日に 150 から 300 サンチームを稼いでおり、その中からの、*Magasin pittoresque* の価格である 2 サンチームは、決して高額ではなかった。そのため *Magasin pittoresque* の他にも、同じ年に、*Musée des familles*、*Mosaïque*、*Magasin universel* などの低価格の雑誌が現れた。

この種の雑誌の成功によって、1836 年、メキシコでも *Penny Magazine* スタイルの雑誌が創刊された。フランスの雑誌 *Mosaïque* の名前を取り、*El mosaico mexicano* と題され、4 巻(1 年分を 1 巻とする)が出た。

しかし、これらのメキシコの「文芸雑誌」たとえば *El mosaico mexicano*(1836 年)、*El recreo de las familias*(1837 年)、*El diario de los niños*(1839 年)、*El almacén universal*(1840 年)などと、ヨーロッパ版の *Penny Magazine* とは根本的な違いがあった。メキシコ版のものは、「1000 部から 1500 部を越えることはなく」(同上書: 206)、その読者層も大衆層ではなかった(同上書: 207)。

Aurenche は、*Penny Magazine* 系のフランスの雑誌とメキシコの雑誌の詳細な比較を行い、1836 年から 37 年、1840 年、1841 年、1842 年にそれぞれに刊行された 4 巻の *El mosaico mexicano* のオリジナリティを見出している。それらの違いは以下のとおりである。

①フランス版とイギリス版は木版画であり、メキシコ版は石版である(同上書: 199)

②フランス版は第 1 段階では *Penny Magazine* の挿絵をコピーしており、メキシコ版はフランス版の記事をコピーしている (後に共に独自のスタイルを作る)(同上書: 199)。

③フランス版は雑誌の「ページの中に 4〜5 枚の異なるサイズの木版画を挿入している」(同上書: 193)。メキシコ版でもそれは同じだが、石版を用い、さらに挟み込みで数枚の独立した石版画を加えている。

④ヨーロッパ版は「自国の建築やギリシアやローマの古代遺跡を美術関連の記事として掲載していた」(同上書: 203)が、メキシコはそうではなかった。

⑤ヨーロッパ版は様々な歴史的な物事に興味があり、メキシコ版は歴史については王族の事故のような、かなり強烈なエピソードにしか興味がなかった。

⑥ヨーロッパ版は種々の科学的な事柄も扱っていたが、メキシコ版は彗星や日食のような、新奇性が高いものしか扱わなかった(同上書: 203)。

⑦ヨーロッパ版は毎週発行していたが(同上書: 193)、メキシコ版は隔週であった(同上書: 207)。

⑧フランスでの雑誌の発刊は政府が民衆を啓蒙しようとする努力と一致していたが(1833 年に Guizot 大臣が初等教育を推進)、メキシコではそういった環境にはなかった(同上書: 206)。

⑨フランス版はイギリスの形式を踏襲していたが、メキシコ版はその逆で、形式を自由に変更していた(独立した石版を挟み込んだり、字と字の間のスペースを変更したり、メキシコ人の好みに合わせて記事を調整したり、オリジナルの詩やアメリカ大陸の地理に関する石版などを加えた)(同上書: 205-207)。

D. *La república de las letras: asomos a la cultura escrita del México decimonónico* (文壇—19 世紀メキシコの文筆文化の片鱗—)

最後に、Belem Clark de Lara と Elisa Speckman Guerra が共同編集した *La república de las letras: asomos a la cultura escrita del México decimonónico*(文壇 19 世紀メキシコの文筆文化の片鱗)の第 1 巻の中から 4 論文を紹介する。

本文献は3巻からなるが、本稿では新しい視点で文学の役割について分析した第1巻を中心に紹介する。なぜなら第2巻は定期刊行物とその内容についてのもので、これについては既にモラ研究所刊行の上述文献(A, B, C)でより詳しく紹介しており、また第3巻は19世紀の41人の作家に関する情報を辞書的に編纂したものであるからである。

第1巻は2部に分かれた20論文から成る。第1部は「文壇の環境とグループ」について、第2部は「文学運動、テーマ、文学ジャンル」について扱っている。全論文が、印刷文化そのものというよりは文学にもっぱら焦点を当てている。これらは本稿で取り上げたモラ研究所が編纂した3冊の業績を補完するものである。

以下では、今現在、再検証が行われている文学史研究の動向に関するわれわれの理解を深める4つの論文について抄訳する。

最初のものは19世紀の知的階層の存在意義について述べたものであり、2番目のものはメキシコにおける「イスパノアメリカ的なもの」の萌芽、3番目はヨーロッパのリアリズム文学のメキシコでの適応、4番目が女性作家による文学作品の誕生と進展についてのものである。

1) "Del saber compartido en la ciudad indiferente: de grupos y ateneos en el siglo XIX"(19世紀のメキシコ市における文芸サークル—無関心な大衆の中で、知識を分かちあう人々—)(pp.89-106)

Carlos Monsiváis が 19 世紀のメキシコの知的階層のあり方と彼らの行動について論じている。彼らのことを語るにあたって、Monsiváis は独特の手法を用いているが、それは彼ら知的階層が文化上の偉大な存在としてではなく、ごく普通の小さな存在として我々の目の前に立ち現れてくることを意図している。

彼の説明によると独立によって文化は宗教色が抜け、世俗化した。当時の知的階層の願望は「カトリックの束縛から逃れ」「解放され」「独自の空間、まずサークルやサロンなど」(Clark de Lara & Speckman Guerra 2005: Vol.1, 92)を作ることであった。そのことによって「学会や文化運動団体を増殖させることだった」(同上書: 91)[10]。

「現在、メキシコ市歴史地区と呼ばれている狭い空間に」(同上書: 92)文化的な場を集中させた(図書館、教育機関、書店など)。地方の文化人は事実上排除されていた。

Monsiváis は、文芸サークルやサロンに参加していた知的階層は「自らの知識を盾のように持ち」、(知的な人間として一般人にとっては「馴染みがないようなこと」でもすべて慣れ親しんでいなければならないと考えていたので)「何でも話題にする」(同上書: 93)という特色を持っていたという。そして「政治的イデオロギーの違いは文学を語るにあたっては壁にならなかった」(同上書: 93)。「サロンではリベラル派も保守派も(仲良く)共存していたのである」。19世紀には「文化は(宗教と並んで)魂を磨くものと考えられており」(同上書: 93)、「文芸サークルのメンバーであることは新市民にとって努力で手の届くレベルの名誉なのであった」(同上書: 93)。

1836年、高名なAcademía de Letrán(レトラン通りの学会)が誕生した。そのメンバーは他の学会と同様に多くの書を読み、学び、普通の人が興味を持たないようなことを論じ合っていた。すなわち「野蛮な輩に対抗するため」(同上書: 93)である。彼ら自身は自らがマイノリティであることを自覚していた。だからこそ互いに話を聞き合い、互いにその自尊心を満足させていたのである。

この種のグループの中から、神の存在を否定するに至る反抗的な者たちも出てくる。Monsiváisは無神論者とは「19世紀のラテンアメリカでは(神の存在という最大の)タブーに立ち向かい、倫理的な懸念によって、自らの市民感覚の形成という理念を持つまでに至った」(同上書: 96)人々のことであった。この種の態度は少しずつ教会や一般社会にも、「共和制社会においては倫理的な規範は市民のコンセンサスによって生まれ、日々教会との取り決めで決まるような絶対的なものではない」(同上書: 96)というサインを送るようになっていった。この姿勢が「それまでは過激になりすぎないように自粛という鎧で護られてきたところから、新しい都市文化」(同上書: 96)を誕生させたのであろう。

Monsiváisによれば「共和国の有機的なカオスを生き抜き」López de Santa Annaの独裁に立ち向かうために、知的階層の人々は「社会と祖国のために闘うことを宣言」し、伝統的な孤立から出て行ったのである。そして「すべてに政治が絡んでくるという事態と闘い」脱出するために文芸雑誌[11]が誕生したのであった。

北米の侵略の2年後の1849年、Liceo Hidalgo(イダルゴ学会)が生まれた。当時、メキシコの国産文学は「国民統合の方法論であり、都市文化を生き、それを広める道」(同上書: 99)であった。メキシコ軍がフランス占領軍を追い出し、マクシミリアーノ皇帝の処刑を経た1867年には、文学は戦争の傷を癒す唯一の方法として、「ヒューマニズムを崇め」「イデオロギー的な対立を和らげ、和解を求め」(同上書: 99)ようとした。Ignacio M. Altamiranoの*El renacimiento*誌は、まさにそれを目的として誕生したと、Monsiváisは記す。

しかし、ポルフィリオ・ディアス(Porfirio Díaz)の登場によって、知的階層はその自治性を失い、「独裁者を賞賛する」(同上書: 100)ようになる。その理由として、ディアスの官僚は2種類の有識者で構成されており、一方は片方よりも有力だったことが挙げられる。有力な側は*científicos*(科学主義者)と呼ばれる、ヒューマニズムを軽蔑する実証主義者であり、他方はヒューマニスト(言語学者や歴史学者で、当時の文部大臣であったJusto Sierraの周囲に集まっていた人々)だったと、Monsiváisは説明する。ヒューマニストのグループは当時の体制の中で「最小限の影響力」しかなく、しかも基本的に、非常におとなしかった。すなわち独裁者を批判の目で見ることもなければ、(例を挙げれば)「国民の識字率の低さを気に病むことすら」(同上書: 103)なかった。

Monsiváisは「ポルフィリオ・ディアスの統治下(1876-1911)、文化活動とは基本的に有名な作家や音楽家や画家や、特に詩人などを叙勲するようなことに限定されていた。(中略) なぜなら当時、詩があらゆるのジャンルの中で最高のものと考えられており、

人々に拡散される至宝だったからである」(同上書: 100-101)。

この点は特に興味深い。というのも 19 世紀末の詩は大衆にも膾炙するものであったからである。Monsiváis があの時代に、有名な詩人は「人間国宝」(同上書: 101)のようなもので、こういった人の 1 人がどこかの街を訪問すれば、「大衆は道に溢れ、歓呼の声を上げ、教会の外に見出した精神的な拠り所に向かって叫びながら、新たな信仰の対象を見つけたのである」(同上書: 100)とまで断言するのは滅多にあることではない。もちろん、詩人の側からも「民主的な意志で、人々と会話したり、街を歩いたり、特別なセレモニーで自分の作品を読む」(同上書: 100)と指摘されるのは大変なことである。

前述の *El renacimiento* 誌を生んだ Ignacio M. Altamirano のグループの後に続いた世代である modernistas(モデルニスタ=モダン主義者)のことも、この文脈で位置づける必要がある。Monsiváis は彼らについてはここではあまり語っていない。強いて言うならば、ディアス時代の文化に重苦しさを加えている、この極端な「ヨーロッパ文化への傾倒」(同上書: 101)があり、それが詩人たちを病ませたと指摘している程度である。Monsiváis は詩人たちが常に自国で満たされないゆえに「他国に憧れる」その文化的妄念を例に取り、Rubén Dario(ラテンアメリカのモデルニスモを代表するニカラグアの詩人)の有名な言葉「我が妻は我が大地のもの、我が恋人はパリ」(同上書: 101)を引用している。このような妄念に取り憑かれるだけではなく、彼が引用する当時の証言によると、多くの芸術家や作家たち(モデルニスタやボヘミアンたち)は偽善的な社会を挑発するため、アルコールやドラッグや売春などの自己破壊的な行為を行う「露悪的な傾向を持っていた」(同上書: 104)。

Monsiváis は「この時代のラテンアメリカの避けがたい特色は、文化的環境の矮小さ」(同上書: 103)であるとする。救いは Ateneo de la Juventud の周囲に集まった知識に飢えた新しい世代の台頭であった。彼らは新しい目標を示すことで、社会と知識階層をその凡庸さから救うに至ったのである。

2) "Lo hispanoamericano en México a fines del siglo XIX"(19 世紀末メキシコにおけるイスパノアメリカ的なもの)(pp.189-199)

Ignacio Díaz Ruiz は、メキシコにおけるイスパノアメリカ的なものの文化的形成と概念化の中での、ホセ・マルティ(José Martí)、*Revista azul* (1894-1896)、*Revista moderna* (1898-1903)の役割を論じている。

結論から言うと、Díaz Ruiz は「19 世紀末から 20 世紀初頭においてのメキシコの文化的・歴史的理想の一部として、イスパノアメリカ的な概念が強固なものとなった理由として、何がその鍵であり、動機であり、その受容を形成したのかを理解するために、キューバの知識人が書いた記事や論文と、(同様に 2 つの雑誌)の内容を徹底的に検証する」(同上書: 199)ことの必要性を強調している。これによって明らかなのは、現在に至ってもこのプロセスがよく知られていないことである。

ホセ・マルティは 1875 年から 1876 年にかけてメキシコに滞在し、Manuel Gutiérrez Nájera とその後も長きに及ぶ緊密な友情を結んだ。この滞在は短かったが、マルティは「違いを克服し、共通の価値観を確立するためのイスパノアメリカの共同体を統一する」(同上書:193) という呼びかけへの共鳴ゆえに消えがたい痕跡を残した。そして、その後も友人たちと続けた手紙での交流や、*El Partido Liberal* 紙への寄稿を通じて、メキシコの中でその存在感を示し続けた。

Díaz Ruiz は 1894 年から 1896 年にかけて、*Revista azul* 誌（メキシコでのモデルニスモの機関誌）が「精力的にイスパノアメリカ文学を広め」(同上書: 196)、なおかつ「意図的に大陸全土の文学を扱おうとしていた」(同上書: 196) ことを彼以前の研究から引用している。このことは同誌の創始者である Gutiérrez Nájera の尽力の賜であり、「彼自身が『異種交配』と呼んだ行為なしには、イスパノアメリカ文学は決して生まれないであろうと、彼はその鋭い批評眼で察していたのである」(同上書: 196)。

Díaz Ruiz はこの *Revista azul* 誌に、14 人のキューバ人、10 人のベネズエラ人、9 人のコロンビア人、6 人のアルゼンチン人、5 人のペルー人、2 人のパナマ人、3 人のエクアドル人、2 人のコスタリカ人、1 人のチリ人、1 人のホンジュラス人、1 人のニカラグア人の作品が掲載されていることで、その Nájera の主張の正当性を証明している。これらの人選の中にホセ・マルティ、ルベン・ダリオ、リカルド・パルマ(Ricardo Palma)といった著名な作家も見出すことができる。

Díaz Ruiz はこの雑誌の強力な布陣を知らしめた後、もう 1 冊の「メキシコにおけるイスパノアメリカ的な概念を強固なものとした」(同上書: 197) 鍵となる雑誌である *Revista moderna* のインパクトについて、「それまでのブエノスアイレスに代わって、メキシコ市がモデルニスモの首都であった」(同上書: 197) と、当時、Max Henríquez Ureña が言及したことを引用して説明する。

Díaz Ruiz は、*Revista moderna* に執筆したラテンアメリカ作家たちの多様性について、毎年、外国から送られていた文学作品の量について強調している。これらの外国作品について適切な書評をまとめていた Amado Nervo と José Juan Tablada の尽力は際立っていた。「この時代のラテンアメリカの避けがたい特色は、文化的環境の矮小さ」(同上書: 103) であるとした Carlos Monsiváis の指摘とは裏腹に、Díaz Ruiz は彼の論文によって、歴史が動いていないように見える時ですら、動いている者は存在しているという希望を与えてくれる。

3) "De reinas del hogar y de la patria a escritoras profesionales: la edad de oro de las poetisas mexicanas"（家庭の花からプロの作家へ—メキシコ女流詩人の黄金時代—）(pp.121-152)

女性が家庭から外へ出られなかった時代において、メキシコの女流詩人たちが黄金時代を築き上げるまでの道のりについての Lilia Granillo Vázquez と Esther Hernández

Palacios の共同研究をここで取り上げてみよう。

この 2 人の女性研究者は、まず、「メキシコには Sor Juana Inés de la Cruz(1651-1695) からMaría Enriqueta Camarillo(1872-1968)の間まで、女性作家というものは存在していなかった」という、メキシコ文学史のごく最近までの既成観念を打ち破る必要があったと述べる(同上書: 121)。彼女らは説得力のある証拠を基に、少なくとも 19 世紀後半に女性達が活動的に執筆していたことを示した。例えば 1839 年に「このように出版物に取り上げられた最初の女性詩人」(同上書: 123)が出現しており、そしてそれ以降、少しずつ出版者たちが「自分達のプロジェクトに 1～2 名の女性詩人を入れることで、刊行物にバリエーションを打ち出す」(同上書: 124)ことを始めたのである。Granillo Vázquez と Hernández Palacios は、「首都圏で女性たちは出版物への投稿を始めており、地方ではもっとその傾向は強かった」(同上書: 124)と確認している。

彼女らによると、

①ロマン主義が女性たちの「情感的で主観的な個性」(同上書:124)を容認し、「女性的な感性で執筆することの追い風」(同上書: 126)となった。

②「家の中での天使」と考えられていた女性たちが「慰めを与えるような」(同上書: 127)詩を書くようになった。

③当初は、それらの詩は、単に、家で開催されていたサークルの中でのみ知られていた。

④時と共に、そういった女性達の家族や友人などで出版界につながりを持つ知的階層がいたお陰で、この種の詩が文芸誌に掲載され始めるようになっていった。

やがて女性達は公の場で、時代的なあるいは愛国的な詩を書き、朗読するまでになる。「独立直後の時代の状況が、本来男性的な行為であった国家に対する論考というものに女性達が加わっていくことを受け入れた」(同上書: 130)からである。これは 2 つのことを意味している。ひとつには、こういった一連の出来事は家庭内に限定された境界から「知的階層のエリートの家族的コネクションを通じて」(同上書: 133)女性たちが外に出て行ったこと。2 つ目は「(彼女らの詩で)公的な場を女性的なものとした」(同上書: 132)ことである。

Granillo Vázquez と Hernández Palacios によれば、「メキシコ女流詩人たちの黄金時代は 1870 年から 1910 年に位置する」とされ、「メキシコ革命とそれがもたらした文学的規範の変化」(同上書: 135)によって終焉を遂げる。

これらの女性詩人の活動については、1850 年、1852 年、1858 年、1859 年、1860-1864 年、1868 年、1870 年、1871 年、1872 年、1873 年、1875 年、1878 年、1880 年、1882 年、1886 年、1887 年、1888 年、1892 年、1896 年、1898 年、1900 年、1901 年、1903 年、1910 年の長い詳細なリストがあり、興味深いものだが、ここでは割愛する(同上書: 135-142)。

従来考えられていたこととは逆に、19 世紀後半を通じて、女流詩人が存在していたことを知るのは重要なことである。さらにこの時代には、後に女性教育の開拓者となった Laura Méndez のような女性もいた。彼女はディアス政権下で「女子のための学校教育を近代化する教育法を学ぶために外国に留学した」だけではなく、「教育に関する国際会議においてメキシコを代表して出席し」、「Talleyrand や Condorcet の理念に基づく女性のための教育の理念や教授法を持ち帰った」(同上書: 146)。

この Laura Méndez のような女性たちが、女子教育においてキリスト教教育から一線を画した理念を確固として採り入れたのである。そのことによって、長いプロセスを経て、女性たちは「家庭の天使」から社会での実体を持った存在となったのである。

教育は単に「女子に対しても義務となった」だけではなく、「女性が大多数の教育スタッフを占めるようになった」(同上書: 146-147)。Laura Méndez だけではなく、Isabel Prieto、Josefina Pérez、Esther Tapia の他、多くの女性たちが(フランス侵攻後の)祖国の再建とディアス政権下の近代化が必要としていた文化改革を促進した。

これらの変革にも関わらず、20 世紀の半ばを過ぎても、女性は男性と違っているというような古い感覚が残っていたのは不思議である。「1966 年にオクタビオ・パスは伝統的な規範を補強していた」(同上書: 151)ことが、「1910 年から 1950～60 年代の作家のリストに女性の名前を見つけられない」(同上書: 152)理由ではないかと、彼女たちは考えている。

4) "Hacia una definición del realismo en *La rumba* de Ángel de Campo"(Ángel del Campo 著 *La rumba* におけるリアリズムの定義に至るまで)」(pp.245-258)

Ángel de Campo(Micrós、Tick-Tack、Pécuchet のペンネームでも知られる)のリアリズムに関する Celina Márquez の論文を簡潔に紹介する。この論文は大変興味深く、とりわけ Carlos Monsiváis による、ディアス期の知的階層は下層階級や彼らの苦しみについてさほど気にかけていなかったとする主張を中和するものであり、文学的リアリズムはヨーロッパからメキシコに到達し、見落とされていなかったということを我々に知らしめてくれる。

Márquez の論文は、Ángel de Campo の作品に焦点を当てており、彼の分析によって Ángel de Campo の「リアリズム」を定義しようとする。この作家によって書かれた作品の多くはいまだに「忘れられ、失われ、散逸している」(同上書: 245)ことを明らかにした上で、Márquez は小説 *La rumba* について、ディアス期や 20 世紀になってからの文芸批評を参考にしつつ、掘り下げる。

結論として

① Ángel de Campo は「冷静で客観的で突き放したような態度による緻密な観察と注意深い分析を通じて、現代の生活と風俗を写生しつつ、リアルな世界を正確に表現する」ことを求めたゆえに、リアリズムを指向した」(同上書: 246)。

②他の全てのリアリズム作家と同様、「それ自体が時代の証言であるために、彼が真正と考えた人生の視点を残す」(同上書: 246)ことを試みた。
③このリアリズムの潮流をロマン主義の「詩的な、あるいは演劇的なまやかし」は「リアリズムの赤裸々さよりも恐ろしい」(同上書: 251)として擁護した。

Ángel de Campo の同時代人が彼のことを「現実の写真家」(同上書: 249)と描写しているが、現代の研究者が彼の作品から同様に「自然主義特有の注意深い分析やロマン主義特有のドラマチックな主観」(同上書: 249)を感じ取り、それらすべてに適度な「政府批判」が混ぜ合わされていることを Márquez は呈示し、彼の作品は複雑で豊かで、「当時の虚飾に満ちた雰囲気やディアス期のフランス志向と対照的なコインの裏側」(同上書: 250)であるとする。

Ángel de Campo と彼の作品を評価する人々は「貪欲さや悪徳、退廃などの主要な原因を血統によるものだとする自然主義の特徴である極端なリアリズムを徹底的に拒絶している」(同上書: 251)ことから、彼のリアリズムを「品があり」(同上書: 251)、「現実とありそうな話との完璧な境界に置かれたもの」(同上書: 250)であると定義する。

Ángel de Campo は「美とは、ロマン主義的でもなければリアリズム的でもなく、自ら発するものであり、黄昏はリアリストが描いたからといって美しさを失うわけではない」(同上書: 251)と考えていた。

Márquez が分析する小説 *La Rumba* の女主人公レメディオスの描写は、貧しい人々の現実を客観的に描写することは、決して貧困に抑圧されて生きる人々を惨めに描くということを意味しないことを明らかにしている。

Márquez によると「筆者のレメディオスに対する大いなる共感は、読むと同時に人物を愛おしく感じさせるものであり」、「無知であることを含め、多くの欠点があるものの悪人ではない登場人物に対する著者の同情が何度も培われていくのである」(同上書: 256)。

レメディオスは Ángel de Campo の言う黄昏のような存在である。彼女の社会的環境がそうでなくても彼女は美しい。ディアス時代は「底辺の人々は社会から見放されていた」(同上書: 253)ことを知っておくことは重要である。例を挙げれば、Ángel de Campo の言葉を借りると、レメディオスのような針子は「深夜まで縫い物をし、翌日、背を曲げ、やつれ果て、疲れ切り、おそろしいほどの量の軍服の山を、わずかな報酬と引き替えるために雇い主の工房に消えていく」(同上書: 253)。

明らかに彼の小説では、ある者たちの貧困は別の者たちを富ませている。詳細には立ち入らないが、小説の女主人公は社会階級を変えることは容易ではなく、そこから逃れようと様々な体験をし、牢に入れられ、結局いったんは抜け出た貧しく抑圧された場所に戻るのである。

Ángel de Campo は女主人公を苦しめたいわけでも、人生を変える可能性を否定しているわけでもなく、読者にメキシコの 2 つの顔を呈示するために主人公を使ったのである。1 つの顔はスラムでの惨めで耐えがたく不当な生活であり、もう 1 つはレメディオ

スのような者は決して受け入れられることのない、人種差別的で、階級的で、エゴイスティックで、表面的で、傲慢で、偽善的な金持ちの世界である。彼女はおとぎ話で起こるようなこととは違い、彼女を愛する白馬の王子を見つけることはできず、悲しい現実から逃れることはできない。

Márquez にとっては Ángel de Campo のオリジナリティは「歴史的・社会的・経済的・文化的な現実」(同上書: 258) を包括した「まさにそのような社会批判の濃い表現」(同上書: 257) にあり、「革命小説への最初のステップだったであろう」(同上書: 258) ことを推測させる土台を作ったということである。

III. おわりに

本稿では冒頭で紹介したメキシコの印刷文化の萌芽期である 19 世紀の印刷文化と文学の発展の理解に不可欠な主要 4 文献をとりあげ、それらに抄訳を加えて紹介したものである。文献の中から選択した論文の点数には限りがあるが、紙幅の制約より、割愛しなければならなかった。例えば風刺画や石版画の技法などについての論文を解説することは大変興味深いものであるが、これらの画像転載許可を取ることが至難であり、また文章のみで解説することは極めて難しく、断念せざるを得なかった。また、政治的なテーマを扱った論文も多く含まれていたが、これらは 19 世紀当時の歴史的な枠組みの詳細な説明を抜きにして解説することは不可能であったため、本稿では扱っていない。

むしろ、本稿で筆者が試みたのは、19 世紀メキシコの印刷文化研究における最新の成果を紹介し、抄訳をつけて解説することで、日本におけるラテンアメリカ研究、特に文学と印刷文化研究の領域における新たな知見を提供することにあった。したがって、本稿で取り上げた論文のテーマは、世界的文脈におけるメキシコの新聞史、著作権問題にまつわる国際論争、出版業界への女性参加、出版の自由に関する論争、フランスの新聞連載小説のメキシコにおける影響、メキシコの独立国家としての政治理念のプロパガンダとして果たした印刷物の意味の分析、メキシコにおけるヨーロッパの文学運動が与えたインパクト等となった。

本稿は、ラテンアメリカ研究の一分野としてのメキシコの出版文化研究の可能性を示唆するものである。読者が近年の同分野における研究の進展を理解し、印刷文化研究に対する関心を高めていただけたなら、幸いである。巻末には本稿で紹介した文献の目次を掲載している。将来は是非これらの文献の原典を直接手にとっていただければと思う。

---

[1] メキシコ国立自治大学の El Instituto de Investigaciones Bibliográficas は、「19 世紀メキシコ書誌学」研究のセミナーを通じて、19 世紀の印刷研究を促進してきた立役者のひとつである。この業績については、別の機会に語ろうと思うが、当面においては、インターネットのサイト Líneas de Investigación, Seminarios y

Proyectos, s/f, <http://www.iib.unam.mx/index.php/lineasinvestigacionseminariosproyectos> [最終閲覧日 2014 年 1 月 14 日]を挙げておく。

[2] 「主として Laurence Stone、Jacques Le Goff、Jean Pierre Rioux、 Jean Francois Sirinelli 、Gugliemo Cavallo、Rogier Chartier、Antoine Prost、Peter Burke、Carlos Serrano 等の研究者のヨーロッパの視点が、我々に、歴史の異なる視点を知らしめてくれた。」(Suárez de la Torre 2003: 12)。

[3] ANUIES (Asociación Nacional de Universidades e Instituciones de Educación Superior en México:メキシコ全国高等教育機関協会); CONACYT (Consejo Nacional de Ciencia y Tecnología:メキシコ国家科学技術審議会); ECOS (Programe d' Evaluation de la Coopération Universitaire et Scientifique:フランス学術科学協力評価プログラム)。

[4] Lacrampe 活版印刷社の A.X. de San Martín による、このスペイン語翻訳版は、<http://openlibrary.org/books/OL25334589M/Los_misterios_de_Paris>で参照できる。San Martín 訳の第 2 版は、1851 年に Imprenta de Lara で出版されているが、翻訳者の名前は省略されている。

[5] 舞台美術家で作家であった Edouard Rivière、印刷業者の Juan N. Navarro、編集者であり石版画家の José Antonio Decaen、舞台作家の Carlos Hipólito Serán、美術家の Casimiro Castro (Suárez de la Torre 2001: 573)

[6] Quirarte によると、1960 年に Francisco de la Maza が、文章と挿画が(プロジェクトの 5 人の推進者のうちの 1 人である)Edouard Rivière のものであると断定したものの、96 年に Ricardo Pérez Escamilla によって、挿画が Casimiro Castro のものであると推定する別の論文が現れたとする(Suárez de la Torre 2001: 575) 。

[7] いずれ Zamacois は *Historia de México*(メキシコの歴史)(1876-1882)を記し、Prieto は、*Memorias de mis tiempos*(我が時代の記憶)(1853)、Manuel Payno は *Bandidos de Río Frío*(リオ・フリオの盗賊)(1889-91)を書くことになる。

[8] 1841 年にアレクサンドル・デュマ父は *Siècle* 紙に、『騎士ダルメンタル(Le Chevalier d'Harmenthal)』を 47 回にわたって連載し、シューは *La presse* 紙に『マチルド(Mathilde)』を 89 回にわたって連載した。1863 年には *Petit journal* 紙がさらに大衆的で荒唐無稽な"Rocambole"風と呼ばれるタイプの小説を売り出したことで、伝統的な"Feuilleton"小説は衰退した(Andries & Suárez de la Torre 2009: 149)。

[9] Théophile Chaigneau の *La dame de Laval*。

[10] Sociedad Pública de Lectura(1820 年)、Instituto Nacional(1826 年)、Academia de San Gregorio(1829 年)、Sociedad de Literatos(1831 年)他。

[11] *Año Nuevo*、*Mosaico*、*Recreo de las familias*、*Museo Popular*、*Repertorio*、*Semanario de las señoritas*、*El apuntador*、*Panorama*、*El liceo Mexicano* など。